

論集 ひととことば

第5号

2003年度 春学期

早稲田大学大学院日本語教育研究科
言語文化教育研究室

論集 ひととことば

第4号

2002年度 秋学期

早稲田大学大学院日本語教育研究科

言語文化教育研究室

目次

特集 パリ第七大学 日本語ワークショップ

パリ第七大学・日本語ワークショップ報告書

早稲田大学大学院日本語教育研究科言語文化教育研究室 5

1. はじめに	5
2. ワークショップの手順と内容	6
3. 授業記録	8
4. アンケート結果	46
5. おわりに	51

パリ第七大学・日本語ワークショップレポート集 53

1. 武道と私	ギョーム	53
2. 外国に住むと私	ジョリー オダン	55
3. 戦争と私	ジャメル ラバイ	58
4. 昔話と私	ジェレミー	59
5. 物の怪姫	アイサ	61
6. サッカ - と私	ヤン コフィ	62
7. 家庭教師の力	高屋 すみれ	64
8. 仕事が好きな理由	シモン	67
9. 抹茶ソフトクリーム	ティタ・ツベトコビッチ	69
10. ロジックの問題と私	ウアング・ミシヨール	72
11. アイデンティティーの問題	アン・オクチョン	74

パリ第七大学・日本語ワークショップ参加者一覧 79

パリ第七大学・パリ第7大学ワークショップおよび特別講演会報告

根来良江 81

1. 「日本語教育と日本事情 - 言語文化教育の意義と問題 - 」 (9月2日の講演会より)	82
2. 「ことばと文化を結ぶ日本語教育 - 総合活動型言語学習の理論と実践 - 」 (9月6日の講演会より)	84

*

私にとって言語文化教育とは何か	徐 揚 89
1. はじめに	89
2. 「日本事情 言語文化」(RSS)という授業	90
3. 「言語文化」における言語とは	91
4. 「言語文化」における文化とは	94
5. 結論：私にとって言語文化教育とは	97
6. 終わりに	98

特集

パリ第七大学・日本語ワークショップ

パリ第七大学・日本語ワークショップ報告書

早稲田大学大学院日本語教育研究科言語文化教育研究室

1. はじめに

今回のワークショップは、2001年にパリのコレッジ・ド・フランスの研究会で、パリ第7大学の太田弘子さんのお会いした折、何気なく話題にしたことがきっかけだった。

総合活動型日本語教育については、すでに海外としてドイツ・ベルリン自由大学で報告を行い、また、いくつかの学会や研究会等で実践に関する話を展開しているが、実際の日本語学習者のためのワークショップは今回のフランスが初めてだった。

教室実践に関しては、すでに98年からの実績の積み重ねがあり、理論的枠組みに関しても、一定の形が出来上がった今、残る問題は、初級レベルでの活動の組織化と、海外でのクラス運営の方法であった。また、ちょうど2001年春より早稲田大学大学院日本語教育研究科が発足し、この総合活動型日本語教育の理論と実践を経験した学生たちの数がある程度そろったところから、今回の条件が整ったといえよう。二つの大学の合同セミナーという形で総合活動型日本語教育のワークショップがこのように実施できたことは、望外の喜びである。

海外の、身近に母語話者の多くない、非日本語社会の環境で、問題発見解決型の総合活動型日本語教育がどの程度有効か、という問題は、当初からの一つの大きな課題であった。今回のワークショップは、こうした問題を乗り越えるための、一つの試みであったわけだが、報告のくわしく記されているように、概ね、好意的に迎えられたとあっていいだろう。

このワークショップに伴い、9月2日（火）にはパリ第7大学で、9月6日（土）には日本文化センターで、それぞれ理論的な立場からと実践的な立場からの講演を行い、多く

の日本語教育関係者と交流を持つことができた。とくに後半の講演では、製作中のビデオの一部の視聴によって、具体的なイメージをもとに活発な議論も展開された。ワークショップにも見学に来てくださった石井陽子フランス日本語教師会会長は、2回の講演にもつづけて参加くださり、さまざまな形で支援をいただいた。

日本語教育研究科言語文化研究室の大学院生14名はボランティアの参加であるにもかかわらず、熱心にクラス運営に携わってくれ、また、パリ第7大学から参加学生11名も、活動への積極的な意欲を見せてくれた。双方の学生諸君の熱意に敬意を表するしだいである。今回のワークショップへの関心は、まだ日本側のわずかな方々に限られていて、フランス側の関心材料となるにはまだ遠い道のりが予想される。日本語教育における実践研究の位置づけがやがて世界にも輪を広がることを念じてやまない。

最後になったが、夏休み明けの忙しい時期に、合同セミナーをお引き受けくださり、ワークショップの、面倒な手配をすべて担当してくださった大島弘子さんに改めて深甚の謝意を表するしだいである。

なお、本実践研究は、早稲田大学海外協定校学生交流経費の助成を得て実施された。

(2003年10月22日：細川 英雄)

2. ワークショップの手順と内容

今回のワークショップは、パリ第七大学所属の学生11人と早稲田大学大学院日本語教育研究科所属の学生14人の計25人が参加し、行なわれた。パリ第七大学の学生は、日本語を専攻している2,3年生が中心であったが、フランス在住の日本語が母語である学生や、留学生としてパリ第七大学に所属し第二外国語として日本語を勉強している学生など、多様な背景の下に日本語を学習している学生が参加するワークショップとなった。

ワークショップ初日、参加学習者には以下のようなハンドアウトが配布され、活動目的と活動内容についての説明がなされた。ワークショップ期間を通しての使用言語はすべて日本語であったが、学習者の共通言語がフランス語であることから、ハンドアウトは日本語の説明の下にフランス語での説明が添えられ、学習者の理解を促す工夫がなされた。

パリ第7大学・日本語ワークショップ

- 期間：9月1日(月) 6日(土)

- 時間：10：00 12：30
- 活動目的：レポート集を作る

	授業項目	授業内容
1日目	授業説明 グループ分け レポートの テーマ決定	この活動の趣旨を説明し、グループに分かれた後、話し合いを通じて各自、自分の興味・関心に即したテーマを決定する。 * タイトルを決め、800字詰め原稿用紙一枚程度のレポートを翌日までに書いてくることをタスクとする。レポートの最後に「なぜ私はこのテーマを選ぶのか」（動機）を書く。「私にとって　とは、～である。」(テーマを自分の問題として意味づける)という一文にまとめるとよい。
2日目	「動機レポート」の検討	各自が書いてきた動機レポートをグループで検討する。そのとき、読み手に意味が伝わらない箇所を問うと同時に、一般論ではなく「私」の視点でオリジナリティのある文章になっているか、ということを考える。 * グループで出された意見を参考に、翌日までに動機レポートを書き直してきてタスクとする。
3日目	「動機レポート」の再検討・書き直し ディスカッション ディスカッションのまとめ	書き直してきた動機レポートをもう一度検討し、書き直しが必要な場合は書き直す。 完成した各自の動機レポートを基にグループ内でディスカッションを行う。 ディスカッションで出された意見と、それを通じて自分が考えたことをグループでの話し合いをもとにまとめる。 * グループで出された意見とそれを通じて自分が考えたことを参考にしながら、ディスカッションをまとめ、「　は私にとって何か」をもう一度考えて結論を出す。翌日までにこれをレポートにまとめてくることをタスクとする。
4日目	下書きの検討	各自が書いてきた下書きをグループ内で検討する。検討する際には評価の基準である「1. オリジナリティはあるか(自分の問題として捉えているか)」「2. 他者の意見を取り入れたか」「3. 動機、ディスカッション内容の流れに論理的一貫性はあるか」に注意すること。 * グループで出された意見を参考に下書きを書き直してきてタスクとする。
5日目	下書きの再検討 レポートを完成させる	書き直してきた下書きを再検討する。 グループで出された意見を参考に書き直し、レポート全体を完成させる。 * 翌日に評価会のために、グループのメンバーのレポートを読み、三つの評価基準に即したコメントを考えてくることをタスクとする。
6日目	相互評価 アンケート	全体を二つのグループにわけ(7人・8人)、相互評価会を行なう。3つの評価基準(1. オリジナリティはあるか(自分の問題として捉えているか)、2. 他者の意見を取り入れたか、3. 動機、ディスカッション内容の流れに論理的一貫性はあるか)に即してそれぞれのレポートについてそれぞれがコメントをする。 今回のワークショップについてのアンケート

各グループには早稲田大学大学院の学生が入り、リーダーやサポーターとしてパリ大7大学の学生のレポート作成を支援する。

この活動は、学習者の興味・関心を、教室での他者との対話を通して学習者自身が言語化し、レポートにまとめていく過程での日本語習得を目的としたものである。¹

一日目から三日目の前半にかけて、学習者が興味・関心に即したトピックが自分にとってどのような意味を持つものなのかをグループメンバーとの対話を通して書く「動機レポート」の作成を行なう。三日目の後半から、その動機レポートをもとに、グループ内でディスカッションする相手を探し、ディスカッションを行なう。ディスカッションでの成果をもとに、もう一度テーマについて考え、自分の結論としてまとめるという作業を四日目から五日目にかけて行なう。六日目は完成したレポートについて、複数の

¹ 詳しくは細川英雄『日本語教育はなにを目指すか』(明石書店2002)を参照

グループ合同でお互いにコメントを出し合い「相互自己評価」を行なう。以上が今回のワークショップの大まかな流れである。各作業は、グループごとに行なわれ、リーダー役の大学院生が各グループでの司会進行を担当した。

早稲田大学日本語教育研究センターでは「読む、書く、話す、聞く」の四技能を統合する科目として週2コマ「総合」という授業が設定されており、参加した早稲田大学・大学院生は、今回のワークショップと同じ理念の下に設計されているこの授業にTAとして参加した経験をもつものがほとんどであった。したがって院生は、この活動が、普段、日本語環境下でないフランスの学習者にどのように受け入れられ、どのように展開していくかという部分に関心を持って参加した。

また、今回のワークショップでは、通常3ヶ月かけて行なう一連の活動を6日間に凝縮して行うということについて、学習者にかかる負担なども危惧された。そのために、大学院生側のこの活動に対する経験などを考慮しグループ間のバランスを保つために、あらかじめ院生のグループ分けを行なった。パリ第七大学の学生にはワークショップ初日、教室に来たものから順に自分の好きなグループに参加してもらい、以下のようなグループ分けとなった。

	早稲田大学学生	パリ第七大学学生
グループ・チェ (リーダー：崔允釋)	崔允釋、森元桂子、中川真由美	ギョーム、オダン
グループ・田中 (リーダー：田中里奈)	田中里奈、武一美、橋本弘美、 サーシャ	ジェレミー、ジャメル、アイサ
グループ・クッキ (リーダー：尹菊姫)	尹菊姫、塩谷奈緒子、三代純平	ヤン、高屋すみれ、シモン
グループ・チャン (リーダー：張珍華)	張珍華、新井久容、小間井麗、 牛窪隆太	ティタ、ミシェール、 オクチョン

(牛窪隆太)

3. 授業記録

この項では、今回のワークショップでどのように活動が展開していったかを四名の学習者のレポート作成過程とそれぞれのグループの授業記録を中心に、より具体的に見ていくことにする。以下に示すAからDの四名の学習者は自分の現在の興味・関心を題材に、学習者A「武道と私」、学習者B「戦争と私」、学習者C「サッカーと私」、学習者D「抹茶ソフトクリーム」とそれぞれにオリジナリティのあるレポートを作成している。

3.1. 学習者A「武道と私」

1日目（グループ分け、授業説明、レポートのテーマ決定）

- 日程：2003年9月1日（月）
- パリ7学生：A、S、O
- リーダー：崔 サポーター：森元 記録：中川

10：00 学生がぼつぼつ集まり始める。グループごとに教室に入ってきた学生を勧誘。3人の男子学生が加わる。まずは雑談でウォーミングアップ。日本語学習歴については、Aは4年間、Sは5年間、Oは2年間で、3人とも日本でフランス語を教えたいとのこと。

10：25 グループ内で、この活動について説明。彼らによると、これまでの日本語の授業やテストでは、翻訳が多かったとのこと。それに対して、この活動ではそれぞれが考えていることを書くものであることを説明。過去の総合受講者のレポートを参考に、身近なものをテーマにするといいたらうとアドバイス。そして、このレポートでは、グループのメンバーで話し合いながら少しずつ完成に近づけていくものであることを伝える。

10：45 細川先生による活動の概要説明（全体に向けて）
全員一人ずつ自己紹介の後、レポートの重要ポイント3点について説明。
Aは、自己紹介の時点で既にテーマを「武道」にすると述べていた。

11：10 再びグループに分かれる。

まず、今日の活動内容の説明として、ハンドアウトに書かれた1日目の授業内容をみんなで読む。その後、過去の総合受講者の例を見ながら、レポートの構成（動機、ディスカッション、結論）について、また、2日目の予定を読み、オリジナリティのある動機レポートとはどんなものかについて説明。Oから「興味」という言葉について質問が出る。

その後、それぞれのテーマについて話し合う。

学習者A：テーマは自己紹介のときに発表済み。スポーツについて。特に合気道は15年前からやっていたとのこと。なぜ好きなのかと質問があると、昔はよく暴れていたけれど、合気道を始めてから静かになったと答えた。Oの「スポーツと武道は違うか」との質問に対しては、「違う。武道は試合じゃない、静かなもの。」との答え。そこで、テーマは「スポーツ」ではなく、「武道」についてということになった。

400字詰め原稿用紙2枚を渡し、動機レポートを書いてくることを宿題とする。

第1回目の原稿

「武道と私」

日本の文化では色々な事ありますからひとつから選び出すことは難しいですね。音楽、文学、映画…。文化ではどちらが一番ですか。あの事知らないけど武道を大好きで日本の文化に重要な地位を占めている。一般的に言って大部分の人々は武道は激して時代おくれのものだと思います。私にとってほかの考え方あります。武道と私は長い話ですね。若い時に私は神経質で騒がしくいつもどこにでも走る。ある日私の中学校の友達は合気武道の授業に私を招待しました。私はそのスポーツが気に入ってその日からぜんぜん止めない。始めに私にとって合気武道はスポーツだけでも段々静かになると武道の目的に考えて始めた。後で空手道糸東流と古武道天真正傳香取神道流をやった。この二つの流派の中でたくさん型があります。武道について型はしあいのようなですが型はほかのことです。

2日目（動機レポート検討）

- 日程：2003年9月2日（火）
- パリ7学生：A、O
- リーダー：崔 サポーター：森元 記録：中川

原稿用紙に書かれたレポートを人数分コピーし、配布。

11：00 Aの動機レポート検討

- ・書きながら難しかったことは？
考えをまとめること。
- ・『他の考え方』というのをもう少し説明して欲しい。
他の人は武道＝戦いと考えるが、私はそうじゃない。どうしてこの型があるのか、その型の意味を考えること。
- ・スポーツと武道はどう違うか？
スポーツは試合に勝つため、相手は他の人、でも武道の相手は自分。私は試合を止めた。
- ・なぜ試合を止めた？強くなるために戦うことも大事では？
レフェリーはルールを説明するが、選手は勝つために守らないことがある。
お金やメダルが目的になっている。
- ・Aさんは何のために武道をするのか？

いろんな型について考えるため。

今日はレポートが途中だったので、テーマを武道にした理由をもう一度考え、今日話したことを順に述べて、最後に「私にとって」でまとめるようアドバイス。

動機の書き直しを明日までの課題とし、終了。昨日参加したSさんは欠席。

第2回目の原稿

「武道と私」

子供の時から日本に興味を持って特別に武道を大好きだ。私にとって日本のイメージは弱者の味方の侍のイメージだ。侍と言えば結局武道のことになると思った。あの時代に遊ぶの時にしばしば棒を持って侍ごっこをした。若い時に私は短気で騒がしくていつもどこにでも走ったり飛んだり他の悪さをする。年と年が過ぎて中学校の入学した。ある日私の中学校の友達は合気武道の授業に私を招待しました。やっと本当の侍になると思ったけど現実とは全く違う。まず私の先生は私に受け身を教えて相手とどう働くも教えて、それで段々自制する教えた。しかし私はまだ激烈なよ。そうすれば空手をやって始めた。数年間くみでの競争をして私の結果はかなりよかった。実習の間に私の日本人の空手の先生塚田先生と出会った。あの授業の間に型を見せてあげてその後で型の分解を見せてあげた。その先生との出会いが私には真の啓示となった。一般的に言って大部分の人々は武道が乱暴だと思って私は「違うよ」と言います。あの日からもし熱考がないなら力は無用なと分かった。今私は合気武道と空手道糸東流と古武道天真正傳香取神道流をやります。あの流派の中でたくさん技術と型あるから私の激烈は熱考になった。熱考と武道のかけで私は静かで忍耐強いになります。

私にとって武道は大切な事と思います。もちろん侍の遺産でしかしそれだけのことですか。武道は生き方だと思います。武道には相手じゃないよ。相手は自分だ。スポーツには相手ある。ある数の人々は武道とスポーツは同じことだと思う。あのこと思いませんがあれは他の話し合いですね。

3日目（動機レポート検討・ディスカッション）

- 日程：2003年9月3日（水）
- パリ7学生：O（Aさんは電車事故のため欠席）
- リーダー：崔 サポーター：中川 森元 記録：森元

第3回目の原稿

「武道と私」

子供の時から日本に興味を持って特別に武道を大好きだ。私にとって日本のイメージは弱者の味方の侍のイメージだ。侍と言えば結局武道のことになると思った。あの時代に遊ぶの時にしばしば棒を持って侍ごっこをした。若い時に私は短気で騒がしくていつもどこにでも走ったり飛んだり他の悪さをする。年と年が過ぎて中学校の入学した。ある日私の中学校の友達は合気武道の授業に私を招待しました。やっと本当の侍になると思ったけど現実とは全く違う。まず私の先生は私に受け身を教えて相手とどう働くも教えて、それで段々自制を保つ習った。しかし私はまだ激烈なよ。そうして空手道をやった始めた。戦うことだけだと思って数年間くみての競争をして、私の結果はかなりよかった。実習の間に私の日本人の空手道の先生、塚田先生、と出会った。あの授業の間に型と型の分解を見せてもらった。その先生との出会って私は武道の大切なこと分かった。一般的に言って大部分の人々は武道が乱暴だと思って私は「違うよ」と言いたいだ。私の意見が一番大切ことは技術その後力は必要なことだ。技術を改良したらよく考えらなければならないね。あの日からもし熟考がないなら力は無用だと分ったから私は段々静かで忍耐強いになります。

私にとって他の大切なことは伝統と思う。武道の技術は侍の遺産ですので畳に入るの時に一生懸命に練習をしなければならない。先生と弟子の関係、義務、尊敬は大切なことと思う。しかしこの頃あの考え方武道には見えないから武道の将来はどうですかと自分にと聞きますよ。武道はスポーツのようになって楽しむことだ。

私にとって武道について昔の考え方と現在の考え方は変化した。どうして、多分人気のスポーツとかお金とか映画のせいだと思う。武道の目的はお金を稼ぐこととか世界では一番強い人になることではなくて伝統を守ると続けると人間の満足と思う。武道はスポーツになったら残念ですよ。私にとって現在のスポーツはドーピングといかさまの同義語だ。武士道の道徳ではない。

4日目（動機レポート検討・ディスカッション）

- 日程：2003年9月4日（木）
- パリ7学生：A、O
- リーダー：崔 サポーター：森元 記録：中川

9：40 O早めに来て、昨日のまとめを書く。

10：30 Aの動機レポート検討

・『熱考』とは何か？この部分の説明を。

よく考えること。（意味の確認の中で、実は『熱』ではなく『熟』（熟考）であることに気づく。）

技術があっても考えないと意味がない。その後で、力がついてくる。

Aのレポートについてディスカッション

- ・スポーツはお金のためだけでなく、自分の健康のためにすることもある。(O)

今、スポーツの目的はお金。選手の目的は勝つこと。武道の目的は、上手になること。

- ・武道ではどうして勝つことが目的じゃないのか？

ディスカッションが不十分だったので、授業後昼食をとりながら、続きを行った。

Aのテーマについてディスカッション

武道のイメージについて話し合う

- ・柔道はスポーツになったと思うが、それはなぜか？(A)

心から離れて、相手に勝つことを目的としたから。

高校等では、生徒の精神的な成長のために柔道をやっているところもあるが。

柔道を教える先生のポリシーによっても変わってくると思う。

- ・どうして武道をすると忍耐強くなるのか？

型のなかにはいろいろな秘密がある。それを見つけるために、頭を使う。だから、よく考えてから、行動するようになった。

- ・戦うことをしないで、上手になれるのか？

- ・型について「考える」こととは？

武道について説明をもう少し詳しく、また何のために武道をするのかを考えてくることに。

第4回目の原稿

「武道と私」

子供の時から日本に興味を持って特別に武道を大好きだ。私にとって日本のイメージは弱者の味方の侍のイメージだ。侍と言えば結局武道のことになると思った。あの時代に遊ぶの時にしばしば棒を持って侍ごっこをした。若い時に私は短気で騒がしくていつもどこにでも走ったり飛んだり他の悪さをする。年と年が過ぎて中学校の入学した。ある日私の中学校の友達に合気武道の授業に私を招待しました。やっと本当の侍になると思ったけど現実とは全く違う。まず私の先生は私に受け身を教えて相手とどう働くも教えて、それで段々自制をする教えた。しかし私はまだ激烈なよ。そうして空手道をやった始めた。戦うことだけだと思って数年間くみての競争をして、私の結果はかなりよかった。実習の間に私の日本人の空手道の先生、塚田先生、と出会った。あの授業の間に型と型の分解を見せても

らった。その先生との出会って私は武道の大切なこと分かった。一般的に言って大部分の人々は武道が乱暴だと思って私は「違うよ」と言います。私の意見が一番大切ことは技術その後力は必要なことだ。あの日からもし熟考がないなら力は無用だと分ったから私は段々静かで忍耐強いになります。

私にとって武道は大切な事と思います。もちろん侍の遺産と伝統でしかしそれだけのことですか。武道は生き方と思います。武道とスポーツでは一番差は武道には相手じゃないよ。相手は自分だ。スポーツには相手ある。ある数の人々は武道とスポーツは同じことだと思う。私の意見は違いますがあれは他の話し合いですね。

ディスカッション

1) 武道にとってどう思いますか？

けいこ : 道の言葉の意味は大切です。道の考え進歩と自分経験です。他の 道 (花道茶道、書道) では同じことです。目的は自分の心を磨く。

私 : そうですね...

サッシャ : 武道にたいして、先生と弟子の関係は大切な事と思います。

私 : はい。その事は一番大切だ。関係がないなら侍の伝統のことを伝達するできない。伝えることないなら武道の死ですね。

2) 武道とスポーツについてどう違いますか。

私 : 私にとってスポーツは体だけトレーニングして武道ではもちろん目的は体を強くになってでもあのことだけではなくて精神と熟考は大切だと思います。

サッシャ : どうして熟考は必要ですか。

私 : 武道の中で色々な技術あるからあの技術愚かしく繰返したらなにも分らない。スポーツは技術は反射になればならない。選手はいつも同じ運動を上手になったらしなければならぬ。つまらないと思います。

3) 私にとって、武道はスポーツになって、例えば空手道と柔道と思う。皆さんはどう思いますか。

武さん : 柔道は相撲になって、アントンヌマントです。

サッシャ : 柔道はオリンピックのゲームになって本当の目的を失ったと思います。

私 : 現在の空手道には同じことです。2008のオリンピックのゲームになりたいけど無理と思います。空手道では色々な流があるから本当の武道の先生あのかたはしたくない。

武道は人気になったら武道連盟の政治はプロになってお金を稼いで、スポンサーを探す。

サッシャ：あのことは武道の精神ではないよ...

私：その上スポーツではドーピングは大切な問題と思います。

結論

私にとって武道について昔と現在の考え方は変化した。昔の武道は先生が一人と弟子が少なくない。でも、武道連盟あるからあのグループの政治は別の考え方だ。武道の連盟の政治はスポーツマンの数を大きくなってお金を稼ぐ。あの政治は武道のためにとっても悪いと思います。武道はスポーツになったら残念ですよね。私にとって現在のスポーツはドーピングといかさまの同義語だ。それは武士道の道徳ではない。

5日目（下書き検討・原稿完成）

- 日程：2003年9月5日（金）
- パリ7学生：O A
- リーダー：崔 サポーター：中川 森元 記録：森元

10：10 O下書き検討

グループのメンバーで

11：05 A下書き検討

A・Oで音読。

・「改良」の意味は何？（O）

…（A）

良くすること？（O）

うん。（A）

「改」は「あらためて？」（O）

うん。（皆）

・「伝統」の意味は？（O）

A、フランス語で説明する。

・「同義語」は？（O）

同じ意味の言葉。似ている意味の言葉。（A）

・「武道の道徳。道徳？」（O）

O、辞書をひく。モラルティ？ロジック？フィロソフィー？（O）

OK。（A）

- ・「結論で、『昔の考え方と現在の考え方が変化した』とあるが、誰の考え方が変化したのか。」(中川)
 武道の考え方は、昔は道徳。でも、今はスポーツ。(A)
 Aさんの考え方について書いた方がよい。(崔)
 ディスカッションの前と後で、Aさんの考え方が変わったということではないのですか。(森元)
 Aさんの考えは?(崔)
 - ・ 伝統の話もいいが、昨日まで書いていた、「武道は生き方だ」というところ、「相手は自分だ」というところが、Aさんの考え方が出ていてよかった。(崔)
 その方がよかったと思う。(中川・森元)
 - ・ Aさんの性格や生き方と武道のつながりについて話すのならば、武道は伝統だという一般論のところはカットしてもよいのではないか。(森元)
 - ・ レポートは、動機・ディスカッション・結論というつくりになっていて、最初に思っていたことが、ディスカッションをして、他の人と話をして、どんな考えに変わったか、どういう考えが増えたか、または、何も変わらなかったかということを書きます。(崔)
- OK.(A)

この後、Aは、ディスカッションの詳細を加えたものを提出するが、パーティーと同時並行という落ち着かない状況で慌てて書いたものであったため、リーダーは、もう一度家で整理して書き直すことを勧めた。結果、翌日に出されたレポートは大幅に修正されて、仕上がりのよいものになっていた。

第5回目の完成原稿

「武道と私」

子供の時から日本に興味を持って特別に武道を大好きだ。私にとって日本のイメージは弱者の味方の侍のイメージだ。侍と言えば結局武道のことになると思った。あの時代に遊ぶの時にしばしば棒を持って侍ごっこをした。若い時に私は短気で騒がしくていつもどこにでも走ったり飛んだり他の悪さをする。年と年が過ぎて中学校の入学した。ある日私の中学校の友達に合気武道の授業に私を招待しました。やっと本当の侍になると思ったけど現実とは全く違う。まず私の先生は私に受け身と相手とどう働く考えて、それで段々自制を習った。しかし私はまだ激烈な男だよ。そうして空手道をやった。戦うことだけ

とあって数年間くみての競争をして、私の結果はかなりよかった。実習の間に私の日本人の空手道の先生、塚田先生、と出会った。あの授業の間に型と型の分解を見せてもらった。その先生との出会って私は武道の意味と大切なこと分かった。一般的に言って大部分の人々は武道が乱暴だけと思って私は「違うよ」と言います。私の意見が一番大切ことは技術その後力は必要なことだ。あの日からもし熟考がないなら力は無用なこと分ったから私は段々静で忍耐強いになります。

私の命の中で武道は大切なことだ。武道のおかげで私の考え方が変わった。武道は生き方だと思う。ある数の人々は武道とスポーツは同じこと、しかし大一番大きな差は武道には相手いないよ。相手は自分だと思う。スポーツには競争相手をいる。でも、「武道とスポーツではどう違いますか」あのことは他の話し合いですね。

ディスカッション

1) 武道にとってどう思いますか？

けいこ : 道の言葉の意味は大切です。あの言葉の考えは進歩と自分の研究と違います。多分あの研究は平静です。他の b 道 には同じことで、目的は自分の磨く。

武さん : でも武道は激しいのにあなたは静かで忍耐強いになります。理由は何ですか。

私 : 武道の中で色々な技術あるから何の戦う代りに考えることを選んだ。そのうえ空手道の授業の前後、瞑想をしました。

中川さん : スポーツには相手いますが武道には相手いない。説明しておねがいします。

私 : 答えは難しいですね。スポーツのためは他の人と遊ぶでも本当理由は勝つと思います。どんなスポーツしても競争があります。武道には他の人と技術をやって競争がありません。武道をするの時に私の目的は実力以上の力を示すことです。それなら相手は自分です。

2) 武道とスポーツではどう違いますか。

サッシャ : 私にとって武道とスポーツの目的は同じことです。大切なことは人の満足を作る。しかしプロのスポーツの目的は違います。選手は気ままに暮らしたらお金を稼がなければならない。スポーツにお金あると色々な問題あります。例えばドーピングやいかさまや付け届けあります。大事なことはぜったいに勝つ。

私 : 武道には道徳は違います。生き方を教えます。あの生き方は先輩の尊敬、義務、正しさと思います。しかしこの頃武道はプロのスポーツのようになります。残念ですね。

結論

私にとって武道とは生き方である。新しいことを習う大好きから武道ではあのことを出来ません。大事なことは力と激しさではなくて熟考です。スポーツではなくても現在武道はプロのスポーツのようになって残念だと思いますよ。

6日目(相互自己評価)

- 日程：2003年9月6日(土)
- パリ7学生：A、すみれ、シモン
- 支援者：クッキ、チェ、塩谷、森元、三代
- 記録：中川

Aは当日に更に書き直したものを提出。

Aのレポートに対するコメント

A : 他の人は武道についてあまり知らなかったから、ディスカッションが難しかった。

すみれ：言いたいことがよくわかる。ただ、一般論とAの考えがばらばらに書かれているから、もう少しすっきりまとめたほうがよい。

クッキ：武道についての思いがこもっている。でも、結論はディスカッションをあまり踏まえていない。

三代 : スポーツや武道をやっている人と話せたらよかったらう。

森元 : グループでの話し合いから機レポートがかなり変わり、よくなった。その点で、「他の人の意見を取り入れる」というポイントについて評価できる。どうしてよく考えることが大事かについても考えられるとよかった。

塩谷 : テーマを絞れるとよかった。

(崔允釋)

3.2. 学習者B「戦争と私」

9月1日月曜日

- 参加者 : 田中・武・サーシャ・橋本・根来・学習者B・学習者J・学習者I

- リーダー : 田中
- 記録 : 橋本

10:00 スタートする。学習者が集まりはじめ、適宜グループに入る。一グループに約3名から4名の学習者である。学習者が全員そろうまでの間、自己紹介をしたり、紙に名札を作ってもらったり、総合のスケジュール表を配り読んでもらったりする。たわいない話をしながらお互いのことと知り合う。

10:40 全体に大きな円になる。細川先生の挨拶がある。:『世界ではじめての試み。自分のことを言うのは簡単。人の話を聞くのは難しい。インターアクションをやる』

一人一人が順番に名前と簡単な自己紹介をしてお互い知り合う。

11:15また各グループにもどる。2003年春学期の総合で取り上げられていたテーマ一覧や、ベッチーさんのレポートを例として配り、テーマのつけ方を参考として紹介する。この時点で、何かイメージしていることがあるかを問う。

学習者Bは、「酒と日本人について」と述べる。その理由として、「酒を飲む前に緊張している。日本人と酒の関係にビックリした。フランスはワインが無くてもしラックスしている。飲み放題に驚いた」といったことを述べている。

他学習者にも聞いたあと、また各自のテーマを詳しく聞き出すよう問いかけた。学習者Bに対しては次のような質問が見られた。

学習者Bに対する質問

日本人と酒の関係か？なぜ書きたいか。(武)

リラックスするために何をするか(根来)

このあと、再び、レポートの構成として「テーマの話」に戻る。先にあげたベッチーさんのレポートにざっと目を通す。レポートで大事な3つの点を、配布資料をいっしょに見ながら確認する。

このときに、学習者から、「オリジナリティがわからない」という意見がでる。田中は「旅行する」を例に取り上げ、旅行するとどんな気持ちになるのか、自分と旅行の関係を書くことを伝え、「私はリラックスだ」と述べる。それに対し武は「私は新しいことに会う。旅行は出会うことだ」と述べる。サーシャは「刺激を得ること」だとし、例をあげながら、各自の考えの違いを表し、それがオリジナリティであることを伝える。

オリジナリティの話をしたあと、再び、学習者のテーマについて質問する。

そのとき、学習者Bは、テーマを「犬」の話にしようかな、と述べている。

「犬と私。ボクの犬、秋田犬に似ている。長く飼っている。もうすぐ5年。フランスの犬は育ち方が違う。日本の犬はいつも紐につながれているから。でもこれでレポートが書けるのかな？」と話している。

この日の話し合いはこれで終了し、明日までに第一回目の動機レポートを書いてきてもらうことを宿題とする。

9 / 1 の感想

学習者Bは、はじめ、イメージしていることとして、「酒と日本人」と述べていた。ちょうど2ヶ月間の日本からの滞在より帰国した時で、「酒と日本人」が印象深かったのだそうだ。しかし、具体的なレポートの内容の話になり、オリジナリティのあるものを書く、という話になってから、学習者Bは「犬」の話にしようかな、と述べる。この時点ではただ漠然と自分の犬について、どんなに可愛いかな、どんなに好きかな、ということをお話することに留まっていた。が、このような話をしながらも、「これでレポートが書けるのかな？」という自問する発言も見られた。

しかし次に見られるように、学習者Bがこの話し合いのあと、一回目に書いてきた動機レポートは『戦争について』である。ここから、学習者Bが、「オリジナリティ」という点及び自分が主張したいこと・書きたいことを振り返りながら、レポートに取り組んだ姿勢をうかがうことができるように思われる。

この話し合いの後、9 / 2（翌日）に提出された学習者Bのレポート（動機部分）

「戦争について」

戦争は人間に発明されました。ところで人間に害を与える。最近、アフリカか、中近東か、チェチェニかに起きた戦争に感動させました。どうして。どうしている人たちは戦うのは必要がありますか。どうして人間は平和的に暮らしを出来ませんか。すべての文明は、エジプトでも、中国でも、ある日戦争しました。

二年前、広島に行った時強く感じましたよ。人々の苦痛は急に見えてきました。どんどん気持は悪くなって、自問しました。答えはまだ見つかりません。

9月2日火曜日 学習者B 記録

- 参加者 : 田中・武・サーシャ・橋本・根来・学習者B・学習者J・学習者I
- リーダー : 田中

10:00よりスタートする。学習者を書いてきてもらったレポートをもとにして活動を行なう。

学習者Bは、『戦争について』というタイトルで動機部分を書いてきた。

院生は宿題で書いてきてもらったレポートを人数分コピーし、それをまず全員で黙読した。その後、学習者Bに質問や感想などを述べる形ではじまった。以下のような意見や質問が見られた。

『感動させました』を詳しく教えて欲しい。

「気持ちが真っ暗になった、悪くなったということ」(学習者B)

感動というのはプラスのイメージがあるから、そう書いたほうがいいのではないか。

『急に』とあるが、広島を見る前とあとでは変わったか？

「変わった。前は考えたことがなかった」(学習者B)

『答えが見つからない』から関心があるのか？

そうだ、どうしたら戦争や原爆がなくなるかに関心がある(学習者B)

このような話し合いをしながら、話題は、南北問題・北と南の格差の話になる。それに対し、学習者Jから「でも南と北と金持ち国もあるが、そんなことだけで説明できないと思う」という意見が出され、そこから世界の「構造」などについて話が展開する。

しかし、学習者Bがこのレポートで一番言いたいことは何か、ということをもっと考える必要があるだろう、という意見が出され、学習者Bのテーマの話し合いをひとまず保留する。

他学習者のレポートを読みその話し合いをする。

11:25から全体で、大きな円になり、全員でテーマ発表を行なう。このとき学習者Bはテーマは「戦争について」である、ということ、2年前に広島に行ったときの話を簡単に話す。

全体で話し合った後、再びグループに分かれ、学習者Bのレポートについての続きとし、グループのメンバーが意見等を述べる。このときには次のような発言が出された。

どうしてそんなテーマを選んだか

「最近の中近東の戦争にすごく心が暗くなった」(学習者B)

自分で何かしたいと思っているか？

『答え』とは一体何を指しているのか？それは、 どうして戦争が起きるのか、についての答えなのか。 または、 戦争が起きないように自分が何をしたらいいのか、という答えなのか。その部分を明確に書いたほうがいいのではないか。

広島で何を見た時、強く感じたのか。広島に行っていない人も読むから、その人にもわかるように、写真がなくてもイメージできるように書くといいのではないか。この「戦争について」というレポートを学習者Bが書くことが、戦争をなくするというデモやコンサートとして考えられると思う。

「大切です・重要です」ではなく、どのように大切か、どのように重要かを書いたほうがいい。

「動物は戦争をしない」という話題について話す。しかし、話し合いが深まるにつれて、学習者Bのテーマずれるのではないかという意見も出る。

9 / 2 の感想

『戦争について』というレポートを学習者Bが書いてきたため、テーマに基づいて話し合いがより具体的に進んだ。今日出された意見を参考にして、学習者Bがどのようにレポートに反映させるのかが楽しみである。

気付いた点は、グループでの話し合いのさい、学習者Bのレポートに対して、院生からだけではなく、学習者J、学習者Iからも率直な感想が述べられていたことである。グループが一つのコミュニティとして機能しはじめている印象を受けた。

この話し合いの後、9 / 3（翌日）に提出されたレポート（動機部分）

『戦争と私』

戦争は人間に発明されました。ところで人間に害を与える。最近、アフリカか、中近東か、チェチェニかに起きた戦争に心が暗くなった。どうして。どうしている人たちは戦うのは必要がありますか。どうして人間は平和的に暮らしを出来ませんか。すべての文明は、エジプトでも、中国でも、ある日戦争しました。

二年前、広島に行った時強く感じましたよ。人々の苦痛は急に見えてきました。どんどん気持は悪くなって、自問しました。なぜ人間は戦争を創造したのは、答えはまだ見つかりません。しかし、戦争は起きることを避けるのために誰でも何かが出来ると思います。自分のことを考えなくて他人のことを考えましょう。

私にとって戦争より人間の考え方のほうが危ないです。

9月3日水曜日 学習者B 記録

- 参加者 : 田中・武・サーシャ・橋本・根来・学習者B・学習者J・学習者I
- リーダー : 田中

昨日の話し合いを反映させ、学習者はそれぞれ自分の動機レポートを書いてきた。

まずは、学習者Bのレポート検討からはじまった。

新しい原稿のコピーを全員で読み、それから質問、意見、感想を述べる形ではじまった。

そのときには、次のような流れで話し合いが行なわれていった。

・『戦争を創造した』のはどういう意味で使ったのか。

『創造』はいい意味で使うのでは？（サーシャ）という意見に対し、田中は、使えないこともないのではないかと述べる。例えば、「創造してしまった」ならいいのでは？残念なニュアンスが伝わる、と述べる。そして、学習者B自身が、「残念の気持ち」を表現したいかどうかで、どちらを書きたいかを選ぶといい、後悔しているのなら、「造り出してしまった」という表現もあると述べる。学習者Bのイメージに任せることにする。

・学習者Jから、「一つの国と他の国と戦うための戦争ではなく、守りのための戦争、自分を守るために戦わざるをえなかったこともある、それを考えたらどうか」という意見がでる。それに対し、学習者Bは、「じゃあ守るために戦争がいいと思うか」という問いを投げかける。話題は第二次世界大戦のことに及ぶ。

・「学習者Bの文章からは、政治的なことより精神的なほうにより重点が置かれていると感じる」（サーシャ）という感想から、「人間の考え方の方が危ない」という話題に移る。武はアウシュビッツから生還してきた人の本を読んだ感想を、「アウシュビッツの傷ではなく、人間がそういうことをできる、人間の怖さではないか」と話す。

そこから話題は、「戦争の事実よりも、それを行い、起こしてしまう人間の方が怖い」という論に進む。根来は、「学習者Bが言いたいのは今の戦争の事実ではなく、それを起こしている もっと根源的なものではないか」と感じたことを述べる。

この一連の流れがすでにディスカッションのようであった。

その後、他学習者のレポート検討に移る。

学習者Jの動機の検討が終わらないが、11：30ごろより、学習者B・学習者Iはディスカッションを始めることにする。

学習者Bと学習者Iのディスカッション参加者は、サーシャ・根来・武である。

学習者Bは、学習者Iの動機レポート（物の怪姫）に対し、『物の怪姫に出てくる人には悪い人は本当はない』という部分に、自分の動機部分の『私にとって戦争より人間の考え方のほうが危ない』という部分との重なりを発見し、「物の怪姫には悪い人はいないの

ですか」(学習者B)と、学習者Iに問い掛けるが、学習者Iは、物の怪姫のストーリーの説明に終始してしまい、話しが噛み合わないまま時間切れになる。

9 / 3の感想

学習者Bのレポートタイトルは、「戦争について」から、「戦争と私」に変わった。

学習者Bの動機検討のとき、学習者Jが述べた「一つの国と他の国と戦うための戦争ではなく、守りのための戦争、自分を守るために戦わざるをえなかったこともある、それを考えたらどうか」ということばに対し、学習者Bがそれを受け止め、「じゃあ守るために戦争がいいと思うか」という問いを投げかけたやり取りは印象深い。学習者Bがそのことについていろいろ考えを深めている様子がかがえた。

動機のレポートは自分の立場を固めることを目的としているが、グループ内で話し合いを行ないながら、学習者Bの立場も次第に固まってきているように思われた。

また、小グループにわかれてディスカッションを行なった学習者Bは、学習者Iのレポートに、自分の動機部分との重なりを見出す。自分のテーマに引き付けながら、相手に質問する学習者Bは、ディスカッションの感覚を徐々に掴んでいるようである。

この話し合いの後、(翌日)に提出されたレポートは無い

9月4日木曜日 学習者B 記録

- 参加者：田中・武・サーシャ・橋本・根来・学習者B・学習者J・(学習者Iは休み)
- リーダー：田中

はじめに、昨日どんなディスカッションをしたか報告する。

学習者Bは、「『戦争になったら、自分が悪い人になってしまう、それが怖い』という意見をもらった」ということを述べる。

のちに全体ディスカッション報告があるため、昨日ディスカッションをしたそれぞれのメンバーわかれて、再び話し合い、ディスカッションをより詳しく行なった。

今日の活動のほとんどが、グループを更に小グループにわけたディスカッションであった。

学習者Bのディスカッション参加者は、サーシャ・根来・武であり、以下のような話し合いが行なわれた。

- ・ 人間は戦争をするが、動物は戦争をしない。(学習者B)
- ・ 動物は戦争をしないか？(院生)
- ・ 動物も戦いをする。いくつか例をあげる。(全員)

- ・ 人間と動物の違いは？（全員で考える。）
- ・ 人間は話しができる。（学習者B）

小グループに分かれて話し合いをしたあと、全体で大きく円を作り、どのようなディスカッションをし、どのような意見をもらい、それについて自分はどう考えるのか、という報告する。

9 / 4 の感想

学習者Bは、自分自身の動機を軸にして学習者Jの「守りのための戦争もしないのか」（9/3）に突き動かされ「私」の問題として「戦争」を考え始めた。9 / 4 のディスカッションでは、他者の意見に耳を傾けそこから自分の考えていることを探り、他者のことばの中から自分の考えていることと近いものを拾い上げ、最終的にはそれを自分のことばにしていこうという姿勢を感じた。

この話し合いの後、9 / 5（翌日）に提出されたレポート（ディスカッションと結論部分）

<ディスカッション>

J : 自分を守るために戦争は出来ませんか。人を殺せませんか。

Moi : 抵抗に入れると思いますが、軍隊として出来ないと思う。

Takeさん : 戦争がなったら、たぶん悪い人になれると思うからこわい。戦争が起きる前に行なわないよう作っておきたいです。

Moi : そのとうりに考えました。一番大切なことは戦争はないようしておきたいですよ。動物は食べるか雌（めす）のために戦う必要がある。しかし、人間は理性が出来るので、戦争の結果に考えられる。これは動物と人間の違いです。動物と人間の違いに考えたあとで、他の違いを見つけました。人間は戦わなくて、話すことが出来るので、一緒に話したほうがいいですよ、ね。

<結論>

私にとって戦争ということは人間特有のことです。

ディスカッションの前に私は決して戦争が出来ないと思いました。でも、戦争の時は感想がかわるかどうか考えませんでした。ディスカッションした後、私の意見はちょっと変わりました。

例えば、戦争がなかったら、家族か友達か自分を守るために、全然したくないのに、他の人に襲われれば、人を殺せると思うようになりました。私はそんなに悪くなるのはとて

も怖いです。だから、考えてから、一番大切な事は出来れば戦争は起きないように作っておきましょう。

9月5日金曜日 学習者B 記録

- 参加者 : 田中・武・サーシャ・橋本・根来・学習者B・学習者J・学習者I
- リーダー : 田中

今日はレポートの検討を行ない、完成原稿を提出する日である。

学習者Bの、ディスカッション報告と結論の検討からはじまる。コピーしたものをグループ全員で読んだ後、次のような流れで、質問や感想が出された。

『作っておきたいです』とは何を作るのか。

平和(学習者B)

『話すこと』の意味をもっと詳しく説明して欲しい。

話し合いで解決できる。ぶつかる前にお互いをよく知るための話し合いである(学習者B)

この学習者Bの返答に対し、武は「ことばを勉強する意味がある。日本語教師は夢のある仕事だなあ」

『戦争の時は感想がかわるかどうか考えませんでした』の『感想』とは何か？

感じる・想う・考え方・気持ち(学習者B)

ディスカッションで出てきた、『コミュニケーション』の部分を結論でもう一度書いたらどうか。

最後にもう一度、『私にとって戦争とは～である』というのを書けるか。

この後、他学習者のレポート検討を行なった後、それぞれが400字詰め原稿用紙に完成原稿の作成をする。それが終わった後、昼食会パーティーを行なう。

9 / 5の感想

最後の話し合いも取り入れながら、5日間で学習者Bは、「戦争と私」というテーマでレポートを書き上げた。最終原稿にも見られるように、最後には「コミュニケーション」というキーワードが学習者Bから出てきたことがわかる。

レポートは形としては完成であるが、話し合いによって出てきたこの新しいテーマについて、今後学習者Bがどのように考えを深めていくのかは、はじまったばかりである、と言えるだろう。

学習者Bの最終原稿

『戦争と私』

< 動機 >

戦争は人間に発明されました。ところで人間に害を与える。最近、アフリカか、中近東か、チェチェニかに起きた戦争に心が暗くなりました。どうして。どうしている人たちは戦うのは必要がありますか。どうして人間は平和的に暮らしを出来ませんか。すべての文明は、エジプトでも、中国でも、ある日戦争しました。

二年前、広島に行った時、原爆ドームの前に強く感じましたよ。人々の苦痛は急に見えてきました。どんどん気持は悪くなって、自問しました。なぜ人間は戦争を創造してしまったのは、答えはまだ見つかりません。

しかし、戦争は起きることを避けるのために誰でも何かが出来ると思います。自分のことを考えなくて他人のことを考えましょう。

私にとって危ないと思うのは戦争というよりむしろ人間の考えかたのほうです。

< ディスカッション >

J : 自分を守るために戦争は出来ませんか。人を殺せませんか。

私 : 抵抗に入れると思いますが、軍隊として出来ないと思う。

武さん : 戦争がなったら、たぶん悪い人になれると思うから怖いです。戦争が起きる前に行かないように平和的な世界を作っておきたいです。

私 : そのとうりに考えました。一番大切なことは戦争はないようしておきたいですよ。

動物は食べるか雌ができるために戦う必要があります。しかし、人間は理性が出来るので、戦争の結果に考えられる。これは動物と人間の間に違いです。

動物と人間の違いに考えたあとで、他の違いを見つけました。人間は戦わなくて、話すことが出来るので、一緒にもっともっとコミュニケーションしたほうがいいと思いますよ。

< 結論 >

私にとって戦争ということは人間特有のことです。

ディスカッションの前に私は決して戦争をすることは出来ないと思いました。でも、戦争になったら気持とか考えかたとか変わるかどうか思いませんでした。ディスカッションした後、私の意見はちょっと変わりました。

例えば、戦争がなかったら、家族か友達か自分を守るために、全然したくないのに、他の人に襲われれば、人を殺せると思うようになりました。私はそんなに悪くなるのはとても怖いのです。だから、考えてから、一番大切な事は出来れば戦争は起さないように平和を作っておきましょう。そのために、人とのコミュニケーションは基本だと思います。

(橋本弘美)

3.3. 学習者C「サッカーと私」

参加者

- リーダ : 尹 菊姫 (ユンクッキー)
- サポータ : 塩谷奈緒子、三代純平
- 学習者 : C, S, A

日時 2003年9月1日 月曜日

参加者

C, S, A、 尹 菊姫、塩谷奈緒子、三代純平

内容

10:20 ~ 各グループに分かれ、活動内容の説明

10:30 ~ テーマ設定

C: 日本語、サッカー、映画のうちのどれか。

10:50 ~ 全体で自己紹介と簡単な活動の説明

11:15 ~ 具体的な活動に関する説明

以前に学生が書いたレポートを見せながら、「動機」「ディスカッション」

「結論」の流れについて説明。

11:25 ~ テーマ設定

C: テーマにはサッカーがいい。

課題

「動機」を800時程度で書いてくる。

日時 2003年9月2日 火曜日

参加者

C, S, A 尹 菊姫、塩谷奈緒子、三代純平

内容

Cさんのレポート検討（読み合わせ後、意見交換）

S：サッカーが「3年目はつまらなくなった」理由は？

「サッカーが最も楽しいことである」のはどうして？

サッカーで「私の問題から逃げられる」とは？

S・菊姫・三代：サッカーがなぜ好きか

C：理由については、フランス語でも考えたことがないから難しい。

...とのことで、話し合いはそれ以上なかなか進まず

A：私達はこういう論文を書くのに慣れていない。フランス人は弁証法的に考える。日本人はそれが苦手である。この論文は非常に日本的なので難しい。

三代：「日本的」、「日本的な論文」とはどういうことか？

塩谷：好きなら理由があるのでは？それは「日本人」にとっても同じく難しいこと。

課題：この日にみんなから聞かれたことを、まず、もう一度考えてみる。考えてみて、そして、日本語で書いてみることを勧めて、検討終了。

Cさんの動機レポート

「サッカーと私」

フランスでは一番人気なスポーツはサッカーである。だから私はこのスポーツに興味があるのは当然である。子供の時テレビに試合を見たが住んでいた場所の回りに公園がなかったし若すぎたしサッカー出来なかった。引っ越してからやっとサッカーをいはじめた。もちろんとても下手だったけど問題なかった。サッカーのおかげでいろいろな友達が出来た。十二才になってクラブに入った。2年間幸せだった。とても内気な私は少し自分自身信頼しはじめた。しかし3年目はつまらなかった。理由ははげしい競そうの登場であった。雰囲気が悪くなってクラブを出ると決めた。私にとってサッカーは最も楽しいことである。その上するうち私の問題から逃げられる。

日時 2003年9月3日 水曜日

参加者

C, S、尹 菊姫、塩谷奈緒子、三代純平

内容

10:40 ~ 「動機」に対するコメント

C : 最初よりわかりやすくなったけど、ほかの人が読んで理解できるかどうか... どうして責任から逃げられるのか、もっと詳しく書かれていたら、わかりやすい。(by S)

11:00 ~ ディスカッション

Cのディスカッション

S : サッカーやっていていいことはなに?

C : フィールドの外にいると自分はすごく内気。だけど、サッカーをしているときは強くなった気がする。

S : Cさんにとっていいサッカーとはなに?

C : サッカーはまず、楽しみ。上手でも下手でも、まずみんながボールに触ること。

三代 : ほかの人がスポーツやるときは?

S : 私は柔道をやっているけど、集中すると、いやなことをわすれてすっきりして、現実の生活に戻れる。

S : 弟にサッカーを薦めるとしたらどうする?

C : わがまましないで、相手を尊敬して。

課題

ディスカッションの内容をまとめてくる。

日時 2003年9月4日 木曜日

参加者

C, S, A、尹 菊姫、塩谷奈緒子、三代純平

内容

Cさんのディスカッションのまとめ(Cさんが「動機」以降をひとりでまとめてくることができなかつたため、全員でCさんと前日ディスカッションした内容を確認。そ

の後、前日の授業記録をもとに、三代さんとCさん2人で「ディスカッション」部分をまとめることに)

Cさんのディスカッションのまとめ

1) 信頼について

Sさん : 今自分がサッカーをしていていい事はどんな事ですか。

私 : 自信が持って強くなるような気がします。私はフィールドに立つと自信があります。サッカーをしないと緊張しています。フィールドの外でちょっと内気で話しにくいです。サッカーをする時、不安が消えて強くなります。

塩谷さん : 他の人はスポーツをする時どんな感じがしますか。

Sさん : 柔道をする時、集中しますから悪い事を忘れます。すっきりして現実に戻ります。

Sさんの意見と私のはだいたい同じである。サッカーをするのは問題を忘れられる。そのお蔭で自信が持っている。

2) 人と関係について

私 : みよさんはテニスをする時何が好きですか。

みよさん : ダブルスするのが好きです。ペアはどこにいるかすぐに分かって話す必要はありません。

私 : サッカーをすると、ゴールを決めるとか、決めさせるとか以外に、好きなのはワンツーです。同じ人にパスをしてボールはすぐに取り返すのは気持ちがいいと思っています。

スポーツのお蔭で、いい関係が作られる。サッカーは違う人を集めるスポーツで、境と不平等を消す。

3) 競争について

私 : テニスをするのは楽しみの為だけですか。

みよさん : 私にとって、一番大切なことは楽しみですけど競争は少し必要だと思っています。クラブでテニスをしましたから上達するために、健全な競争が要ります。

私にとって、サッカーはゲームだから競争が嫌いけれども、みよさんの立場が分かる。いい競争は、皆で一緒に上手になるということである。悪い競争は集団の和を壊すと思っている。

日時 2003年9月5日 金曜日

参加者

C, S, A、尹 菊姫、塩谷奈緒子、三代純平

内容

書き直してきたレポートを検討、確認しながらその場で書き直しを行った。今日まで書かれたレポートを基にコピーしみんなのレポートを読んでくることを課題に授業終了。

日時 2003年9月6日 土曜日

参加者

S, A、尹 菊姫、塩谷奈緒子、三代純平、ちえ、森元、中川、G

内容

相互自己評価

Aの評価

A : 大変だったけど、レポートを書くのはいい経験だった。みんなで一緒に書いたレポートだった

S : もっと未来のことを書けばいい。相手の意見をちゃんと聞いてよかった。

クッキー : もっと自分の問題に引き寄せて、どうしてこの仕事が好きなのかをもっと書けばよかった。動機とディスカッションが少しずれている。

三代 : 仕事のやりがいとかについてディスカッションができるよかった。

G : お茶と日本語の興味がよくわかる。でもディスカッションがわかりにくい。シモンさんの仕事についてもっと説明して欲しい。オリジナリティはいいけど、流れが少し悪い。

森元 : 動機はよかった。ディスカッションも仕事の価値などをもっと話せばよかった。

(ほかも大体同じ)

Sの評価

S : テーマを見つけるのが難しかった。書きたいことがたくさんあって、まとめるのが大変だった。ディスカッションを通じて、意見も変わってきた。

クッキー : 経験に基づいたユニークなもので、とてもよかった。

G : とて面白い。ディスカッションで、相手と対場が違っておもしろかった。
結論をもっと詳しく、どうして教えるのがすきとか、書けばよかった。

森元 : 結論が教師の適性でタイトルと少しずれている。

塩谷 : 教えることの意義とかについてもっと話を膨らませればよかった。

(ほかも大体同じ)

課題

相互評価の意見を参考に書き直し、メールにて最終版を提出

Cさんの完成レポート

「サッカー - と私」

1. 動機

フランスでは一番人気なスポーツはサッカー - である。だから、私はこのスポーツについて関心を持っているのは当然である。

子供の時に、テレビで試合を見て楽しかったと思ったのでやってみたかったが住んでいた場所の回りに公園がなかったし、若すぎたし、サッカー - できるまでに待たなければならなかった。引っ越してから、やっとサッカー - やり始めた。もちろん、とても下手であったけど私の唯一の目的は遊びであったから問題がなかった。十二歳になってクラブに入った。二年間幸せばかりであった。皆の社会的環境は違うのに、よい関係が作られた。そのチームで上手でも下手でも重要じゃなくて必要なのは楽しむことであった。それに、とても内気である私はサッカー - のお蔭で性格が変わって精神的に強くなった。フィールドに立つと、自信が持っているような気がする。けれども、フィールドの外で自信が少しだけ増加した。残念ながら、三年目の時、障害に直面した。なぜなら、二年連覇を成しとげたから、チームの評判は段々増えてくるにつれて、激しい競争は登場した。ある相手の態度が変わって傲慢になって良いサッカー選手を証明するために、彼らは個人のプレイをしてしまった。しかも、あまり上手じゃなかった選手を無視したり叱ったりしていた。従って、この嫌な雰囲気の中でクラブを出ることにした。私は皆がただのゲームとしてサッカー - と見なすと思っていたがすっかり誤ってこれから異なった目でサッカー - を判断した。ところが、サッカーが永遠に好きで同じ楽しみでやり続けるが公園だけでやってる。

年を取って今まだ家にいる子供の中に私は年上で妹と弟に対して責任がある。面倒を見ることは大変である。その上、妹と弟は反抗期に入っているから命じると断ることがある。その為、緊張がたまる。この悪いことを忘れるようにサッカー - はいい手段である。

私にとって、サッカーは主に楽しみである。子供から今までそう思っている。しかし、激しい競争があるとこの楽しみは消えがちなかもしれないと思っている。そして、サッカーは遊びだけでなく、悩みから逃げられるような出口である。

2. ディスカッション

信頼について

Sさん：今自分がサッカーをしていていい事はどんな事ですか。

私：自信が持って強くなるような気がします。私はフィールドに立つと自信があります。サッカーをしないと緊張しています。フィールドの外でちょっと内気で話しにくいです。サッカーをする時、不安が消えて強くなります。

塩谷さん：他の人はスポーツをする時どんな感じがしますか。

Sさん：柔道をすると、集中しますから悪い事を忘れず。すっきりして現実に戻ります。

Sさんの意見と私のはだいたい同じである。サッカーをするのは問題を忘れられる。そのお蔭で自信が持っている。

人と関係について

私：みよさんはテニスをするのが好きですか。

みよさん：ダブルスするのが好きです。ペアはどこにいるかすぐに分かって話す必要はありません。

私：サッカーをすると、ゴールを決めるとか、決めさせるとか以外に、好きなのはワンツーです。同じ人にパスをしてボールはすぐに取り返すのは気持ちがいいと思っています。

スポーツのお蔭で、いい関係が作られる。サッカーは違う人を集めるスポーツで、境と不平等を消す。

競争について

私：テニスをするのは楽しみの為だけですか。

みよさん：私にとって、一番大切なことは楽しみですけど競争は少し必要だと思っています。クラブでテニスをしましたから上達するために、健全な競争が要ります。

私にとって、サッカーはゲームだから競争が嫌いけれども、みよさんの立場が分かる。いい競争は、皆で一緒に上手になるということである。悪い競争は集団の和を壊すと思っている。

3．結論

私にとって、サッカーは大切な事である。初めには、ゲームであったが、今はまだ遊びでも、必要になった。サッカーのお蔭で 自信が少し持ってきた。フィールドに、相手は信頼してくれるからである。日常生活で、内気なら、関係を作るために、もっと難しいだと思っている。サッカーをすると、言葉は要らなくて、いい関係が築いてフィールドの外でこの関係は続く。他の事は、日常生活の問題を忘れる世界である。皆さんはテイスカッションの時、 スポーツについて、賛成であった。

4．終わりに

大学の外で日本語でめったに話さないので、このワークショップは日本人と話す機会であった。本当に面白くて皆さんはとても親切であった。そんなに短かったのは残念であったけど、いい経験になる。皆さんと細側先生、ありがとうございました。

(尹 菊姫)

3.4. 学習者D「抹茶ソフトクリーム」

9月1日月曜日 学習者D 記録

参加者

新井・牛窪・こまい・チャン(リーダー)・学習者M・学習者C・学習者T

10:00 学習者が集まりはじめ、適宜グループに入り、グループ内自己紹介をする。学習者が全員そろうまでの間、紙に名札を作ってもらったり、ワークショップのスケジュール表を配り読んでもらう。

10:40 全体に大きな円になって、参加者全員の簡単な自己紹介を行う。細川先生からワークショップの活動内容について簡単な説明がある。

11:15 またグループにもどり、何を書くのか、枚数などをふくめて活動内容を説明する。

そして、書きたいタイトルについて話し合う。

学習者Dは、今一番興味・関心のあるものが「抹茶ソフトクリーム」だと述べる。その理由としては、「日本の抹茶ソフトクリームを愛しているし、抹茶ソフトクリームを食べるととても幸せだ」といったことを述べている。それに対して「どうして抹茶アイスが好きなのか」(牛窪・チャン)という質問をうけ、学習者Dは抹茶ソフトクリームの味のことをろいろ説明した。学習者Dの話から学習者Tは抹茶ソフトクリームの味がたいへん好きであることが伝わってきた。そして、この日は教室で話したことをまとめてみることを明日までのタスクとして活動を終える。

9月2日火曜日 学習者D 記録

学習者Dが前日の話し合いに基づいて書いてきた文章のタイトルは「緑の幸せ」である。下記はその本文の全文である。

「緑の幸せ」

アジアでは緑茶のさまざまな種類がある。毎種類は別の味を渡し、別の料理に必要な材料になる。その料理は緑茶が入らなかつたら、味も全然違うだろう。例えば、抹茶から作ったソフトクリーム。

私はたいてい甘い物が嫌いなのに、抹茶アイスが大好きである。なぜならば、甘いよりも苦い味があるからだ。その二つの結婚はおかしくて、本当に中毒だと思う。

抹茶アイスを初めて食べたのは四年前である。その頃は他の日本料理も初めてだったので、抹茶アイスは一番強い印象ではなかった。

上記の学習者Dの文章をグループ内参加者分コピーを配り、学習者Dが音読する。学習者の文章を検討する話し合いの注意点は、「オリジナリティー」と「分からない部分は書いた人に質問すること」であるとチャンが説明する。学習者Dの音読が終わったあと、次のような質問が出された。

- ・ 本文の中の「別の味を渡し、」の意味はなにか。
- ・ 中毒だと悪いイメージがあるけれども、「幸せ」と「中毒」の関係はどのようなのか。
- ・ どうして幸せなのかが知りたい

このような質問に対して学習者Dの発言は、大好きな日本で食べた抹茶ソフトクリームの味と、日本を思い出させてくれる抹茶ソフトクリームについての発言が多かった。

そして、最後に「これからどういうふうにかきたいか」という質問を受け、学習者Dは「日本でのことを書いてもいいか」という質問をする。学習者Dの質問に対して、「いいと思う」という意見と「私にとって抹茶ソフトクリームが何々である」というセンテンスを最後に入れて書くことも必要であるという意見をもらい、この日の学習者Dの作文検討は終える。

9月3日水曜日 学習者D 記録

前日の検討をもとに学習者Dが書き直し、書き加えてきた文章の全文は下記内容である。

「緑の幸せ」

緑茶は東アジアの国にしかできない。東アジアの国の中には緑茶から料理を作る民族が多い。その料理を食べてみたら、緑茶は調味料ではなく、むしろ必要な材料だということの良く見えると思う。例えば、抹茶から作ったソフトクリームの場合は、緑茶を入れない時は普通のバニラソフトクリームである。

私はたいてい甘い物が嫌いなのに、抹茶アイスが大好きである。なぜならば、甘い味よりも苦い味があるからだ。その二つの結婚はおかしくて、本当に中毒だと思う。

抹茶ソフトクリームを初めて食べたのは四年前である。その頃は他の日本料理も初めてだったので、抹茶ソフトクリームが一番強い印象ではなかった。

次に、去年は私は抹茶ソフトクリームをおいしく食べたが、幸福の重要な要素ではなかった。しかし、パリに帰ると強い印象に残った。という訳で今年は日本に来て、すぐ抹茶ソフトクリームを買って、ベンチに座って、幸福を感じていた。そのまるで幸福式は毎日五分以上かかった。

ただし、私の抹茶ソフトクリームは食べるための時間だけではなく、他の理由もある。まず、時間を止め、環境に離れないで、客観的な見かたが出来るというわけである。それで、私の好きな忙しすぎの日本をゆっくりするのは幸せである。

日本以外は抹茶ソフトクリームを買わないからこそ抹茶ソフトクリームは日本だけの幸せだというのが良く分かる。いったん買わなかったらもう私は日本でいないと感じている。

私にとって抹茶ソフトクリームは日本の感を再発行する。日本が大好きなのに、日本でいるの短時間を攻め取るのは難しい。というわけで緑の色の象徴で自然の

学習者Dの文章を何行かで区切りながら参加者全員が分担して音読をする。音読後、学習者Dは次のようなコメントをもらう。

- ・ 本文中の「短時間を攻め取る」とはどういう意味なのか

このコメントに対して学習者Dは、「日本で短い生活の中で惜しい、貴重な時間」と「抹茶ソフトクリームは日本にいると感じるきっかけとなる」と答えた。それでも「私にとって」がまだはっきりとわからない」というコメントを受け、グループ内ディスカッションでもっと話し合いをすることにした。また、「本文では「私にとって抹茶ソフトクリームは」と書いているから、タイトルが「抹茶ソフトクリーム」ではないのか」という指摘もあった。

このあと学習者Dは大学院生のこまいさんとディスカッションをした。そして、そのディスカッションの報告をするための下書きを作成することを宿題としながらこの日の活動を終えた。

9月4日木曜日 学習者D 記録

学習者Dのディスカッション報告はディスカッションの内容をメモしたノートのコピーで行った。下記はそのノートの全文である。

リラックスやゆっくりする時

れい : 京都では毎日何時頃抹茶ソフトクリームを食べましたか

私 : 授業が本当に忙しかったから、抹茶ソフトを食べるのは授業の少しあとでした。

れい : 何時でしたか。

私 : 午後五時でした。

れい : 場所はベンチだけでしたか。

私 : 他の公の場所もありましたけれど、普通は私はゆっくり食べるのが出来る所でした。

今の思い出

私 : その時は現実や時間と気持ちの関係を探しました。

れい : 抹茶ソフト以外はその関係を感じるものもありますか。

私 : はい、あります。例えばプルストのマドレンというケーキです。

れい : 分かりました。思い出のことですね。

私 : でも、私の場合は現実の思い出を忘れないように良く感じることです。写真を撮ってすぐ見ると同じ感じです。

社会学

れい : ティタは日本文化に興味を持ちますね。抹茶ソフトと日本文化はどんな関係がありますか。

私 : まず、ベンチに座って、人を見ているのは社会学と関係があるかもしれませんが。それから私は日本が大好きです。全部好きです。いいものも好きし、悪いものも好きです。

れい : 例えば、いいものといえば、どんなものですか。それから悪いものはどんなことですか。

私 : いいのは正しさです。それは町でも良く見えます。街角もきれいし、人もていねいです。それから悪いのは浮浪人とかやくざとか不景気の問題とか、全部好きです。本当の変愛ですから。

れい : でも、ティタはパリで住んでいますから、パリも好きですね

私 : 実はコーヒーが嫌いし、パリも嫌いです。

気持ちの関係の説明

れい : どうして日本が好きですか。

私 : 気持ちですから、説明できません。

れい : 勉強を始めた時はどんな興味がありましたか。

私 : まず、おずの映画を見て、日本はエキゾチックな国だと思っていました。

れい : それから段々興味が色々ありましたね。でも、どうしてですか。

私 : 全然分かりません・・・・・・ 正反対が多いですから。いつでも反対と一緒に生活します。

れい : 例えば？

私 : 例えば、大都市で非常ににぎやかな店がいっぱいある道のすぐ隣は静かな神社があります。それから伝統と現代性の反対があります。抹茶ソフトもそうでしょう。

伝統的な緑茶と新しいソフトクリームの反対があるし、甘い味と苦い味の反対もあります。

ディスカッションの内容を適宜参加者全員が分担して音読した。そのあと、書き方について説明がリーダーからあった。その内容は本文の前に「目次」を入れることによ

て他のグループの人が読みやすくなるということと、この活動の感想を書く項目として「終わりに」を書いてみることであった。

学習者Dのディスカッション報告については、主に「どのように結論付けをするか」についてであった。共通するコメントは、「なぜ日本がそんなにすきなのか」というディスカッションの部分について学習者Dがもっと考えてみる必要があるのでは、あるいはそれについてもっと書き加えたほうが良いのではという内容であったが、学習者Dから明確な話は出されなかった。今回はこのようなコメントを参考に全文を作成してくることにし、この日の活動を終えた。

9月4日木曜日 学習者D 記録

この日、学習者Dが書き直して来た作文の全文は下記の通りである。

「抹茶ソフトクリーム」

1. 緑茶は東アジアの国にしか出来ない。東アジアの国の中には緑茶から料理を作る民族が多い。その料理を食べてみたら、緑茶は調味料ではなく、むしろ必要な材料だというのを良く見えると思う。例えば、抹茶から作ったソフトクリームの場合は、緑茶を入れない時は普通のバニラソフトクリームである。

私はたいてい甘いものが嫌いなのに、抹茶ソフトクリームが大好きである。なぜならば、甘い味よりも苦い味があるからだ。その二つの結婚はおかしくて、本当に中毒だと思う。

抹茶ソフトクリームを初めて食べたのは四年前である。その頃は他の日本料理も初めてだったので、抹茶ソフトクリームが一番強い印象ではなかった。

次に、去年は私は抹茶ソフトクリームをおいしく食べたが、幸福の重要な要素ではなかった。しかし、パリに帰ると強い印象に残った。というわけで今年には日本に行き、すぐ抹茶ソフトクリームを買い、ベンチに座り、幸福を感じていた。そのまるで幸福式は毎日五分以上かかった。

ただし、私の「抹茶ソフトクリーム式」は食べるための時間だけではなく、他の理由もある。まず、時間を止め、環境に離れないで、客観的な見かたが出来るというわけである。それで、私の好きな忙しすぎの日本をゆっくりするのは幸せである。

日本以外は抹茶ソフトクリームを買わないからこそ抹茶ソフトクリームは日本だけの幸せだというのが良く分かる。いったん買わなかったら、もう私は日本でいないと感じている。

私にとって、抹茶ソフトクリームは日本を感じるのをきっかけになる。日本の生活の短い時間を攻め取るのは難しい。それは緑の幸せである。

2. リラックスやゆっくりする時

れい「京都では毎日何時頃抹茶ソフトクリームを食べましたか」

私「授業が本当に忙しかったから、抹茶ソフトを食べるのは授業の少しあとでした。」

れい「何時でしたか。」

私「午後五時でした。」

れい「場所はベンチだけでしたか。」

私「他の公の場所もありましたけれど、普通は私はゆっくり食べるのが出来る所でした。」

れいさんは抹茶ソフトクリームは一日中のリラックスのイメージがあるだろうかという話を私とした。

今の思い出

私「その時は現実や時間と気持ちの関係を探しました。」

れい「抹茶ソフト以外はその関係を感じるものもありますか。」

私「はい、あります。例えばプルストのマドレンというケーキです。」

れい「分かりました。思い出のことですね。」

私「でも、私の場合は現実の思い出を忘れないように良く感じることです。写真を撮ってすぐ見ると同じ感じです。」

社会学

れい「ティタは日本文化に興味を持ちますね。抹茶ソフトと日本文化はどんな関係がありますか。」

私「まず、ベンチに座って、人を見ているのは社会学と関係があるかもしれません。それから私は日本が大好きです。全部好きです。いいものも好きし、悪いものも好きです。」

れい「例えば、いいものといえば、どんなものですか。それから悪いものはどんなことですか。」

私 「いいのは正しさです。それは町でも良く見えます。街角もきれいし、人もていねい
いです。それから悪いのは浮浪人とかやくざとか不景気の問題とか、全部好きです。
本当の変愛ですから。」

れい「でも、ティタはパリで住んでいますから、パリも好きですね。」

私 「実はコーヒーが嫌いし、パリも嫌いです。」

その部分の話では抹茶ソフトクリームは社会学の観察だろうというディスカッションした。答えは抹茶ソフトクリームはバーガーやコーヒーと同じ味である。そのものは本来所で食べたら、観察の道具になるのが出来る。

気持ちの関係の説明

れい「どうして日本が好きですか。」

私 「気持ちですから、説明できません。」

れい「勉強を始めた時はどんな興味がありましたか。」

私 「まず、おずの映画を見て、日本はエキゾチックな国だと思っていました。」

れい「それからは段々興味が色々ありましたね。でも、どうしてですか。」

私 「そうですね。全然分かりません・・・正反対が多いですから。いつでも反対が一緒に生活します。例えば、大都市で非常ににぎやかな店がいっぱいある道のすぐ隣は静かな神社があります。それから伝統と現代性の反対があります。抹茶ソフトもそうでしょう。伝統的な緑茶と新しいソフトクリームの反対があるし、甘い味と苦い味の反対もあります。」

3 . 私にとって、抹茶ソフトクリームは日本の象徴である。私は日本で楽しんで、私の日本に生きる時間が早くなるというのを恐れている。抹茶ソフトクリームでゆっくり自分の日本の生活を実感する。そのうえ、私には抹茶ソフトクリームは社会学の観察の道具である。だからリラックスの時間しかなく、逆に正反対の面の実在と悟る時である。

4 . 「考えたための日本語ワークショップ」は非常に良き体験だった。授業でパリ大学の生徒は早稲田大学院生と一つ一つテーマを決め、私達の一人一人の作文の問題を解いた。その方法のおかげで私は日本語の作文に自信が出来た。「皆さにどうもありがとうございます。」

参加者全員が分担して音読したあと、誤字・脱字の部分で気が付いたところについて検討し、内容の確認を行った。そして、次のような質問がだされた。

フランスでまったく同じ抹茶ソフトクリームを買えたら買うのかどうか

この質問に対して学習者Dは「フランスでは買わない。日本で買うこととは空気と環境が違うから」と答えた。そのほかには次のような話し合いがなされた。

3の「逆に」という部分是要らないのでは

動機のまとめである「私にとって、抹茶ソフトクリームは日本を感じるのをきっかけになる。日本の生活の短い時間を攻め取るのは難しい。それは緑の幸せである。」という文の順序 について話し合う。

このような話し合いのあと、その場で清書をする時間をもうけ、400字詰め原稿用紙に全文を書いてもらった。下記は清書して出された学習者Dの完成文である。

「抹茶ソフトクリーム」

1. 動機

緑茶は東アジアの国にしか出来ない。東アジアの国の中には緑茶から料理を作る民族が多い。その料理を食べてみたら、緑茶は調味料ではなく、むしろ必要な材料だというのを良く見えると思う。例えば、抹茶から作ったソフトクリームの場合は、緑茶を入れない時は普通のバニラソフトクリームである。

私はたいてい甘いものが嫌いなのに、抹茶ソフトクリームが大好きである。なぜならば、甘い味よりも苦い味があるからだ。その二つの結婚はおかしくて、本当に中毒だと思う。

抹茶ソフトクリームを初めて食べたのは四年前である。その頃は他の日本料理も初めてだったので、抹茶ソフトクリームが一番強い印象ではなかった。

次に、去年は私は抹茶ソフトクリームをおいしく食べたが、幸福の重要な要素ではなかった。しかし、パリに帰ると強い印象に残った。というわけで今年には日本に行き、すぐ抹茶ソフトクリームを買い、ベンチに座り、幸福を感じていた。そのまるで幸福式は毎日五分以上かかった。

ただし、私の「抹茶ソフトクリーム式」は食べるための時間だけではなく、他の理由もある。まず、時間を止め、環境に離れずに、客観的な見方が出来るというわけである。それで、私の好きな忙しすぎの日本をゆっくりするのは幸せである。

日本以外は抹茶ソフトクリームを買わない。だからこそ、抹茶ソフトクリームは日本だけの幸せだというのが良く分かる。いったん買わなかったら、もう私は日本でいないと感じている。

日本の生活の短い時間を攻め取るのは難しい。私にとって、抹茶ソフトクリームは日本を感じるきっかけになる。だからそれは緑の幸せである。

2. ディスカッション

リラックスやゆっくりする時

れい「京都では毎日何時頃抹茶ソフトクリームを食べましたか」

私「授業が本当に忙しかったから、抹茶ソフトを食べるのは授業の少しあとでした。」

れい「何時でしたか。」

私「午後五時でした。」

れい「場所はベンチだけでしたか。」

私「他の公の場所もありましたけれど、普通は私はゆっくり食べるのが出来る所でした。」

れいさんは抹茶ソフトクリームは一日中のリラックスのイメージがあるだろうかという話を私とした。

今の思い出

私「その時は現実や時間と気持ちの関係を探しました。」

れい「抹茶ソフト以外はその関係を感じるものもありますか。」

私「はい、あります。例えばプルストのマドレンというケーキです。」

れい「分かりました。思い出のことですね。」

私「でも、私の場合は現実の思い出を忘れないように良く感じることです。写真を撮ってすぐ見ると同じ感じです。」

社会学

れい「ティタは日本文化に興味を持ちますね。抹茶ソフトと日本文化はどんな関係がありますか。」

私「まず、ベンチに座って、人を見ているのは社会学と関係があるかもしれません。それから私は日本が大好きです。全部好きです。いいものも好きだし、悪いものも好きです。」れい「例えば、いいものといえば、どんなものですか。それから悪いものはどんなことですか。」

私 「いいのは正しさです。それは町でも良く見えます。街角もきれいだし、人もいて
ねいす。それから悪いのは浮浪人とかやくざとか不景気の問題とか、全部好きです。
本当の恋愛ですから。」

れい「でも、ティタはパリで住んでいますから、パリも好きですね。」

私 「実はコーヒーが嫌いだし、パリも嫌いです。」

その部分の話では抹茶ソフトクリームは社会学の観察だろうというディスカッションを
した。答えは抹茶ソフトクリームはバーガーやコーヒーと同じ意味である。そのものは本
場で食べたら、観察の道具になるのが出来る。

気持ちの関係の説明

れい「どうして日本が好きですか。」

私 「気持ちですから、説明できません。」

れい「勉強を始めた時はどんな興味がありましたか。」

私 「まず、おずの映画を見て、日本はエキゾチックな国だと思っていました。」

れい「それからは段々興味が色々ありましたね。でも、どうしてですか。」

私 「そうですね。全然分かりません・・・正反対が多いですから。いつでも反
対と一緒に生活し ます。例えば、大都市で非常ににぎやかな店がいっぱいある道のすぐ
隣は静かな神社があります。それから伝統と現代性の反対があります。抹茶ソフトもそう
でしょう。伝統的な緑茶と新しいソフトク リームの反対があるし、甘い味と苦い味の反
対もあります。」

3 . 結論

私にとって、抹茶ソフトクリームは日本の象徴である。私は日本で楽しんで、私の日本
に生きる時間が早くなるというのを恐れている。抹茶ソフトクリームでゆっくり自分
の日本の生活を実感する。そのうえ、私には抹茶ソフトクリームは社会学の観察の道具で
ある。だからリラックスの時間と同時に、正反対の面の実在と悟る時間である。

4 . 終わりに

「考えるための日本語ワークショップ」は非常に良き体験だった。授業でパリ大学の生
徒は早稲田大学院生と一つ一つテーマを決め、私達の一人一人の作文の問題を解いた。そ

の方法のおかげで私は日本語の作文に自信が出来た。「皆さんにどうもありがとうございます。」

(張珍華)

4. アンケート結果

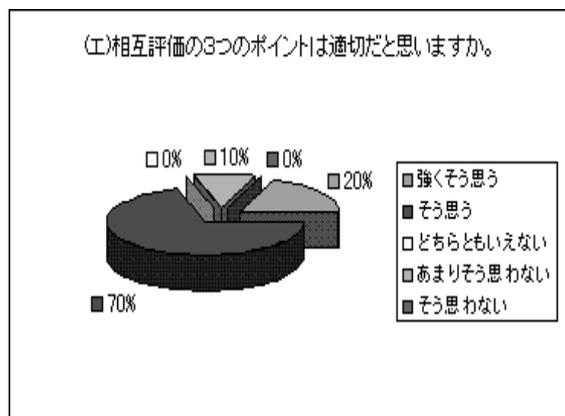
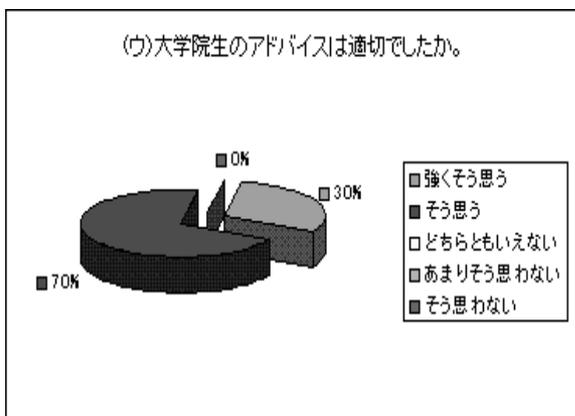
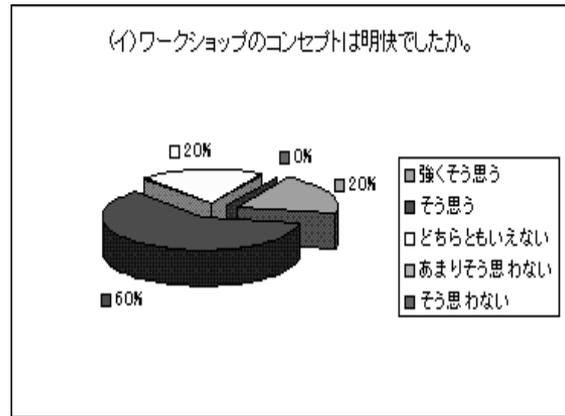
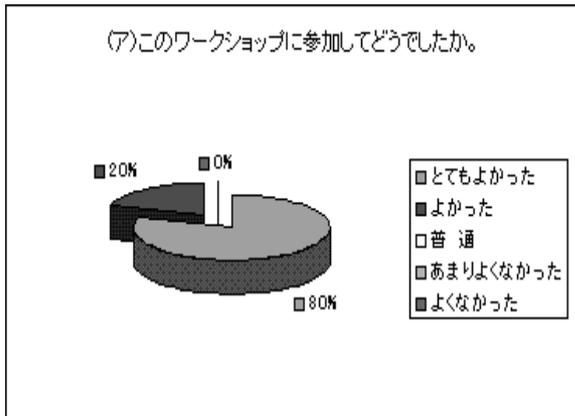
今回のワークショップでは、最終日に学習者に対してワークショップの内容に関するアンケート調査を行なった。そのアンケートで得られた結果が次のものである。アンケートは選択式のものを4項目用意し、その下に自由記述の項目を設け、ワークショップに関する感想を自由に書いてもらった。日本語の下にフランス語での説明も併記し、自由記述の欄はフランス語での回答も可とした。

4.1. 選択部

このアンケートは、記名式で行われ、ワークショップに参加した学生12名中10名から回答を得た。表における各欄の数値は、回答数 である。また、下の円グラフは、そのパーセンテージによってグラフ化したものである。

	とてもよ かった	よかった	普通	あまりよく なかった	よくな かった
(ア)このワークショップに参加してどうでしたか。	8	2	0	0	0

	強くそう 思う	そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	そう思わ ない
(イ)ワークショップのコンセプトは明快でしたか。	2	6	2	0	0
(ウ)大学院生のアドバイスは適切でしたか。	3	7	0	0	0
(エ)相互評価の3つのポイントは適切だと思いますか。	2	7	0	1	0



アンケートの数値から見る限り、このワークショップに対する参加者の感想は、概ね良好なものであったと言える。この活動のコンセプトに把握しづらい面があると感じた参加者や、相互評価の3つのポイントに疑問を抱く参加者が見られたものの、全体としては、各グループの大学院生のアドバイスを適切なものとして受容し、それをいかしながらレポート作成が行われたことが伺える結果となった。

(森元桂子)

4.2. 自由記述部

アンケートの自由記述部である「今後の活動のために、このワークショップについてのあなたの考えを自由に書いてください。」には9名が答えている。以下にその全文を示す。

「こんなワークショップには初めて参加したのでとてもよかったと思います。特に私は書くのが下手だったからこのワークショップに参加してちょっと自信を持つようになりました。そして今までの授業とは違って日本人の学生たちと私が一応書いたレポートについ

て討論しながらだんだん書き直したから他の人の意見を聞くいい機会になりました。できたら、もっとこんな機会があったらいいと思います。」

〔AHN Ogcheong : オクチョン〕

「私にとって大学以外に日本語で話す機会はありませんから役に立ちました。そして日本人と話し合うことは面白くて楽しかったと思います。いい経験になります。ありがとうございました。」

〔KOFFI Yann : ヤン〕

「このワークショップは面白かったのです。皆さんはやさしくて、まじめにべんきょうしたのです。しかし、私は日本語が下手なので、全部分からないのです。時々学生は日本語で話し過ぎるのです。活動は色々だったから、私達のクラスはつまらないことはありません。」

〔MESSAOUDI Aïssa : アイサ〕

「まずこの企画に参加させていただいて、どうもありがとうございました。(イ)の質問で『どちらともいえない』にをしたのですが、その理由は、まず早稲田の方とお会いする前に『ワークショップ』という言葉が耳に入りました。ところが、この『ワークショップ』って具体的に何なのかが分かっていませんでした。初日の時も参考の紙をいただいたのですが、それでもその言葉の意味がはっきり分からず...やっと最終日あたりに『ワークショップ』のおもしろさ、目的、結果が分かりました。とてもよいコンセプトだと思いますが、『ワークショップ』の進み方：動機 ディスカッション 結論 の目的と理由が最初の日、分かりにくかったです。でも、このワークショップはすごくよい勉強になったのでありがたく思っています。早稲田大学生とのコミュニケーションもよかったことなので、これからもe-mailでやりとりを続けたいと思っています。」

〔高屋 すみれ 〕

« Je pense que ce type de séminaire est très utile pour renforcer les relations entre les étudiants de nos deux pays. Durant ce séminaire on a pu échanger nos opinions librement, et tout cela en japonais !!! De ce fait j'ai pu prendre plus confiance en moi pour discuter en japonais avec d'autres personnes.

Ainsi, je pense que l'on devrait renouveler cette expérience tous les ans, et pourquoi pas nous aussi mettre en place un projet identique.

Enfin, je tiens à remercier les professeurs et tous les étudiants qui ont eu la gentillesse d'être très patient avec nous. »

「私はこのようなタイプのワークショップは2つの国の学生間の関係をさらに強くするのに大変有益だと思います。このワークショップを通して、私たちは自分たちの意見を自由に交換することができました。それもすべて日本語で!!! そのことにより、私は他の人々と日本語でディスカッションすることに対し、さらに自信を得ることができました。

そういうわけで、私はこの試みを毎年繰り返していければいいと思います。私たちにまた同じプロジェクトを用意していただけないものでしょうか。

最後に、ご親切にも、私たちに大変根気よく付き合ってくださいました先生方と学生のみなさんに、お礼を申し上げます。」

〔 BUISSON Guillaume : ギヨーム 〕

« J'ai beaucoup apprécié le concept de ce séminaire. Il est beaucoup plus motivant d'apprendre le japonais sans avoir l'impression qu'on te note. Le système d'évaluation par des critères chiffrés est très stressant et de ce fait j'étais beaucoup plus à l'aise pendant ce séminaire. De même façon je trouve l'idée de la « critique objective mutuelle » très enrichissante. Comme le temps était très serré et qu'on devait préparer les rapports très vite je trouve que la méthode employée était très appropriée. Au travers des discussions on se rend compte soi-même des « fautes » dans le rapport.

Dans l'avenir je vous conseille de prolonger la durée du workshop en deux semaines pour que les élèves puissent consacrer plus de temps au choix du thème et à l'enrichissement du développement. Je trouve que six matins représente une échelle temporelle assez étouffante. »

「私はこのワークショップのコンセプトを大変高く評価します。人が自分を評価しているという感じを持たずに日本語を学ぶことで、モチベーションがよりずっと上がります。デジタル化された基準による評価システムは大変ストレスになります。したがって、私はこのワークショップの間よりずっとリラックスできました。同様に『客観的相互評価』の考えもお互いを大変豊かにするものだと思います。時間が非常に詰まっていた、レポートをとっても早く準備しなければならなかったのも、とられた方法は大変適切なものであったと思います。ディスカッションを通して、自分自身でレポートの中の間違いが分かりました。今後は、学生がテーマの選択により時間をかけられるよう、また、レポートの発展を豊かなものにするためにも、ワークショップの期間を2週間に延ばしたらいいのではないかと思います。午前中6日間でというのは、かなり息の詰まる時間の展開になったと私は思います。」

〔 CVETKOVIC Tita : ティタ 〕

« J'ai pris beaucoup de plaisir à discuter avec tous les étudiants de Waseda. Ce « Workshop » m'a appris beaucoup de choses et m'a permis d'améliorer mon niveau de japonais. Cependant la

rédaction en japonais était parfois un petit peu difficile pour un étudiant de 2^{ème} année. Mais nous avons réussi à la surmonter ! Merci beaucoup. »

「私は早稲田の学生のみなさんとのディスカッションを大いに楽しみました。この『ワークショップ』は私に多くのことを教えてくれ、私の日本語のレベルを向上させてくれました。しかしながら、日本語での作文は大学2年目の学生にとって、時々ほんの少し難しかったです。それでも私たちは乗り切ることができました！どうもありがとうございました。」

〔RABAHI Djamel : ジャメル〕

« Je pense qu'il est dommage de travailler sur un sujet libre. Il aurait été plus intéressant de travailler ensemble sur le même sujet. Sinon très bien. »

「私は1つの自由なテーマについて検討するのは残念だと思います。同じテーマについて皆さんと一緒に検討すれば、より面白かったでしょう。そうでなかったにしても、大変よかったです。」

〔SERVERW Simon : シモン〕

« Les compositions écrites sont différentes en français et en japonais. Ce fut intéressant de voir les différences de logique, aussi bien du point de vue de la composition même ainsi que de celui des personnes présentes.

En ce qui concerne mon groupe, il était composé de personnes ayant des expériences, des airs bien distincts, ce qui a permis de rendre cette activité conviviale. Ce fut aussi utile pour s'auto-évaluer quant à son niveau de japonais. En ce qui me concerne, cela m'a permis de voir le niveau qu'il m'est possible d'atteindre. »

「フランス語と日本語での作文は違います。作文という観点から、そしてまた出席者の観点からもロジックの違いに気づき、興味深かったです。

私のグループに関しては、体験が違うメンバーで構成されていて、活動を親近感のあるものにしてくれました。それはまた、自身の日本語のレベルに関して自己評価するために有益でした。私については、自分が到達可能なレベルに気づかせてくれました。」

〔WANG Michel : ミシェール〕

期間が1週間と短かくレポートを仕上げるのにプレッシャーがかかり、大学3年生にくらべ2年生は活動が少々大変に感じたようだが、最後には皆さん全員がレポートを書き上げることができ満足しているようである。そのほか、はじめに活動のコンセプトが分かりにくかったようだが、参加していくうちにこの活動の目的や利点に気づき、好意的にとらえ

てくれたようである。ディスカッションにおいて考えを述べ合うこと、そのディスカッションを通してレポートを訂正しつつ発展させていくこと、その成果を参加者全員で相互評価し合う点などが、メリットとして挙げられている。 (小間井麗)

5. おわりに

このワークショップへの参加の話が持ち上がった当初、この活動がフランスの大学生にどのように受け入れられるか、果たして日本国内と同じ方法が通用するのかと少し不安に思った。しかしながら、ワークショップ初日、教室に集まってきた学習者と活動を進めていくうちに不安は消え去った。ワークショップに参加した学習者は皆、一生懸命に自分の考えを日本語で表現しようとしていた。それは学習者のレポート作成の過程の中にも見ることができるだろう。またアンケートの結果からも、学習者が今回のワークショップに積極的に参加し、レポートを作成する中で、それぞれにある成果を得たことが分かる。

今回、一大学院生として一つのグループに参加する中で、文型や漢字、語彙などの「知識としての日本語」を持ちつつも、それを実際に運用することになれていないために発話に苦労していた学習者が、ワークショップの中で次第に自分のことばとして消化し、また更に、相手に伝わるように新しいことばを模索するようになる過程に触れることができた。今考えるとこの過程はまさに、ことばの教育と呼びうるものだったのでなかろうかと感じる。この経験は今回のワークショップに参加した大学院生として貴重で新たな刺激であり、今後、日本語教育を考える際の大きな示唆を与えてくれるものになったということを、参加してくれた学習者の皆さんに感謝したい。 (牛窪隆太)

パリ第七大学 日本語ワークショップレポート集

0. 目次

1.	「武道と私」	ギョーム
2.	「外国に住むと私」	ジョリー オダン
3.	「戦争と私」	ジャメル ラバイ
4.	「昔話と私」	ジェレミー
5.	「物の怪姫」	アイサ
6.	「サッカーと私」	ヤン コファイ
7.	「家庭教師の力」	高屋すみれ
8.	「仕事が好きな理由」	シモン
9.	「抹茶ソフトクリーム」	ティタ・ツベトコビッチ
10.	「ロジックの問題と私」	ウアング・ミシヨール
11.	「アイデンティティの問題」	アン・オクチョン

1. 武道と私

ギョーム

子供の時から、日本に興味があって特別に武道が大好きだ。私にとって、日本のイメージは弱者の味方の侍のイメージだ。侍と言えば、結局武道をやりたいと思った。

あの時代に遊ぶ時に、しばしば棒を持って侍ごっこをした。若い時に私は短気で騒いでいつもどこにでも走ったり飛んだり他の悪さをした。年と年が過ぎて中学校を入学した。ある日、私の中学校の友達に講義武道の授業で私を招待した。やっと本当の侍になると思ったけど現実とは全く違う。まず、私の先生は私に受身と相手と運動を教えて、それで自制を習った。しかし、私はまだ 激しい男だ。そうして空手道をやりはじめた。戦

うだけだと思って数年間、組み手の競争をして私の結果かなりなかった。実習の時に私の空手道の先生になる日本人の塚田先生と出会った。あの授業の時に、型と型の分解を見せていただいた。その先生との出会って私は武道の意味と大事なことがわかった。一般的に言って、大部分の人々は武道が乱暴だけだというと私は「違うよ」と答える。私の意見が一番大切なことは技術。その後、力は必要なことだ。あの日からもし熟考がないなら、力は無用なことがわかったからわたしは段々静かと忍耐強くなる。私の心の中に武道は大切なことだ。武道のお蔭で、私の考え方が変わった。武道は生き方と思う。ある人々は武道とスポ - ツは同じことと思っているがしかし、一番の大きな差は武道には相手はいない。相手は自分だと思う。スポ - ツには競争相手がいる。でも、「武道とスポ - ツではどう違いますか」という質問は他の話し合いだ。

1.1. デスカッション

武道についてどう思いますか。

恵子 : 1道 zという言葉の意味は大切です。あの言葉の考えは進歩と自分の研究と思います。多分、あの研究は平静でしょ。他の 1道 zでは同じ事で目的は自分お心を磨く。

武さん : でもぶどうははげしいのにあなたはしずかで忍耐強くなります。理由は何ですか。

私 : 武道の中で色々な技術があるから、戦う代わりに考えることを選んだ。その上、空手道の授業の前後 黙想をしました。

中川さん : スポーツには相手がありますが武道には相手がいらない。説明してお願いします。

私 : 答えは難しいですね。スポーツの場合は、他の人と遊んでも、本当の理由は勝つと思います。どんなスポーツしても競争があります。武道には他の人と技術をやって競争がありません。武道をする時に私の目的は実力以上の力を示すことです。それなら相手は自分です。

武道とスポーツはどう違いますか。

サッシャ : わたしにとってぶどうとスポーツの目的は同じことです。大切なことはひとの満足を作るしかしプロのスポーツの目的は違います。相手は気ままに暮したらおかねを稼がなければなりません。スポーツにはお金がなると色々な問題なります。例えば、ドッピングやいかさまや付け届けがあります。大切なことは絶対に勝つ。

私：武道には道徳は違います。生き方を教えます。あの生き方は先輩の尊敬、務、正しさと思います。しかし、この頃武道はプロのスポーツのようになります。残念ですね。

1.2. 結論

私にとって武道とはいき方である。新しいことを習う大好きだから、武道ではそのことができる。大事なことは力と激しさではなくて熟考である。スポーツではなくても現在武道はプロのスポーツのようになって残念だと思っています。

1.3. 終わりに

このワークショップはとても面白くて短いです。もう一週間はいい...残念！色々な経験をして私にとって一番体験で巢みんな三とほそがわ先生どうもありがとうございました。

2. 外国に住むと私

ジョリー オダン

2.1. 動機

この時代には世界中旅行するのは簡単になって、どこにも早く行けるので、留学や観光どんどん増えました。みなさんに色々なところ、他の人間の生活などを経験することが出来てきました。

私はこの機会を捕りにしようと決めました。自分の目で他の国を発見したかったから、テレビに放送される情報などを聞く代わりに直接興味がある所に行こうと思っていました。でも、それだけではなくて、本当の理由は外国語を習う為にかもしれません。僕にとって、外国語が完璧に話せるようにその国にいかねばなりません。さらに、国の文化と国民の考え方が分かったほうが良いと思います。

私は外国に住むには経験が少しあります。その経験を語りながら、私の気持ちを伝えたい。

第一回から、四カ月間アイルランドに行ったときに、いい感じがしました。やっと自分に一人暮らし知らない環境に住むのは出来て、とても嬉しかったです。初めてでした

ので、緊張もありましたけれども、冒険のような感想があって、感じた気持ちは幸せでした。もちろん困ったこともありました。一番目のスーパーに行く度にはレジで店員の言ったことは分かりませんでした。それなのに、「もっと英語を頑張れ」と自分に言いました。だから、段々上手にしゃべられるようになりました。最初はいつも難しいですけども、自信と忍耐と我慢のお陰で出来ました。そういう感じはとても楽しいです。多分まだ知らない国に着いたら、一番大変なことはその環境の人々の生活に慣れるのです。それに慣れて、言葉が十分に分かれば、大丈夫です。

私にとって、違いは面白いです。それは文化と人々の関係と考え方と言語の違いです。その違いがあったら、一生懸命頑張ります。毎回新しい挑戦が出て、まだ分からない問題が起きて人生は面白くなります。その他に、毎日の暮らしにも他の国で習ったことも使えるです。

その理由で、外国に住むのはとても面白い経験です。

2.2. ディスカッション

1. 外国に住んだことありますか。どう感じましたか。

中川さんは一年間イギリスに住みました。嫌な気持ちがしました。友達と家族が居なかったから。行く前に行きたかったけど、着いたら大変になりました。そう言っても英語が段々通じてなったので、それは楽しかった。

けいこさんはあまり経験がありませんでしたが、話せたときに「ステージクリア」というイメージが現れました。その「ステージクリア」は問題を一つずつを解決するなんです。それで自信を強められると言いました。

チエさんにとって、二年前に日本に住んでいました。私が思った逆に、すぐ慣れて、自分の生活で住んで始めました。

武さんとサーシャさんも外国に住むに敬虔あります。武さんはアラブの国で三年間外国人だけと関係ありましたから、その経験はとても役に立ちました。「新しい私」を作られました。考え方は広くなるということです。

サーシャさんにとって、外国に長く住むと社会の問題が段々現れると思います。

私には最初に興味がある国の言語をしゃべられるように頑張ります。チエさんの答えにびっくりしました。けいこさんが言った「ステージクリア」にも上達するのイメージとして好きでした。

2. 同じ国に居ると挑戦まだありますか。

私には外国に住むには言語の朝鮮だけではなくて、他のチャレンジも沢山ありますので。同じ国でも、いい仕事を探して、家族を作るというチャレンジは面白いです。

3. 外国語が完璧に話せるように外国に住むのは必要ですか。

チエさんにとって、習いたい言語で生まれた国に行かなくても大丈夫です。その国の人々達と話せば、これで十分だと思います。適当な方法を使えば、外国に住まなくても上手に話せるのは出来ます。

言語だけの話をすればそういうことはそうですけど、私の意見は違います。外国語は言葉だけではなくて、社会と文化の近い関係あります。それですが、多分私の考えは私の国から遠い地方だけ正しいです。例えば、日本の文化とフランスのは差が多いです。

4. 環境の変化が好きですか、好きではないですか。

その答えは先に聞いた質問の関係ありました。

中川さんは大きい変化が好きではないと言いました。それなのに、もちろん旅行で知らないものを見るのは好きです。

けいこさんは長く変化のないと面白くなくなります。だから、環境が時々変わっても楽しいです。

2.3. 結論

質問をし始めたとき私はそのレポートは皆さんに関係がありませんでしたと思いき、皆は外国に住むには経験がありませんから。それだけ、このディスカッションが終わってから、面白い話が出来て、安心しました。

たけさんが言ったとうりに、外国に住むと「新しい私」を作られます。考え方が広くなって、自分の知識は大きくなりますので。その表象と全く賛成しています。

私にとって、外国に住むには一番面白いのは挑戦を挑むことです。

2.4. 終わりに

一人一人が自分のストーリーを語りながら、私は各意見を聞くと考え方は段々広がったということがわかりまして、このワークショップで話して、意見を比べて、とても面白くなりました。この一週間お世話になって、ありがとうございました。

3. 戦争と私

ジャメル ラバイ

3.1. 動機

戦争は人間に発明されました。ところで人間に害を与えます。最近、アフリカか、中近東か、チェチェンかに起きた戦争に心が暗くなりました。どうして、どうしている人たちは戦うのは必要がありますか。どうして人間は平和的に暮しを出来ませんか。すべての文明はエジプトでも、中国でも、ある日戦争しました。

二年前に、広島に行った時、原爆ドームの前に強く感じましたよ。人々の苦痛は急に増えてきました。どんどん気持は悪くなって、自問しました。なぜ人間は戦争を創造してしまったのは、答えはまだ見つかりません。

しかし、戦争は起きることを避けるのために誰でも何かが出来ると思います。自分のことを考えなくて他人のことを考えましょう。

私にとって危ないと思うのは戦争というよりむしろ人間の考えかたのほうです。

3.2. ティスカッション

ジェレミー：自分を守るために戦争は出来ませんか。人を殺せませんか。

私：抵抗に入れると思いますが、軍隊として出来ないと思います。

武さん：戦争がなったら、たぶん悪い人になれると思うから怖いです。戦争が起きる前に行わないように平和的な世界を作っておきたいです。

私：そのとうりに考えました。一番大切な事は戦争はないようにしておきたいですよ。動物は食べるか雌ができるために戦う必要があります。しかし、人間は理性が出来るので、戦争の結果に考えられます。これは動物と人間の間違い違いです。

動物と人間の違いに考えたあとで、他の違いを見つけました。人間は戦わなくて、話すことが出来るので、一緒にもっともっとコミュニケーションしたほうが良いと思いますよ。

3.3. 結論

私にとって戦争ということは人間特有のことです。

ディスカッションの前に私は決して戦争をすることは出来ないと思いましたが、戦争になったら気持ちとか考えかたとか変わるかどうか思いませんでした。ディスカッションした後、私の意見はちょっと変わりました。

例えば、戦争がなったら、家族か友達か自分を守るために、全然したくないのに、他の人に襲われれば、人を殺せると思ふようになりました。私はそんなに悪くなるのはとても怖いです。だから、考えてから、一番大切な事は出来れば戦争は起きないように平和を作っておきましょう。そのために、人とのコミュニケーションは基本だと思います。

4. 昔話と私

ジェレミー

一年生の終わりに先生達から日本語の文章を読んだほうが良いと言われた。それから日本への旅行の間にバイリンガルブックを何冊か買ってしまった。あの本は全部日本の昔話について書かれた。例えば桃太郎の話とか金太郎の話とか読んだことがある。

初めに日本語文と英語の翻訳を読み、最近から日本語文だけ読み返してドンドン分かりやすくなった。しかし分かりにくい言葉も表現も構造も沢山書いてある。昔話と言うのは子供のために話しの事だけど、どうしていくら上手でも易しい言葉が書いてあっても分からないようになる事もある自問した。あの時に初級者として読み練習のために童話のほうが新聞より読みやすそうだった。しかし漢字と単語の問題を乗り越えてから、辞書を調べながら童話も新聞も読めるけど、童話に特徴の日本語を読める。だから自分にとって童話のほうが新聞より読みにくいと思う。

難しい日本語について例えば「俺様」とか「鬼が島」とか「べろべろ」のような擬音語と擬態語良く見える。まず「俺様」という言葉は授業でオレが失礼な名称と言われるし、自分に「さん」「君」「様」およびのような接尾語を使っては駄目と教えて下さった。それから桃太郎の話で鬼が自分のことをそんなに呼ぶのを読んだと吃驚した。それに二つの他の事は辞書を調べても中々見付からないし、日本人の友達に聞いたら自然な事なので、優しくて分かりやすい説明出来ない事があるんだ。

最後に昔話は昔と現代の文化を説明すると思う。例えば今年フランスでジブリのスタジオから「猫の恩返し」というアニメを発行された。でもこのアニメは「鶴の恩返し」という昔話と関係があるかもしれないと思う。それに昔と現代の文化を分かりやすくして日本の鏡と思う。

私にとって昔話とは初めて易しそうな子供のための話だけではなく、最近深い意味あるし、複雑な日本語を使われるのを分かってしまった。

田中さん：「子供の頃にじぶんで童話の言葉から自分のイメージを作ったけど、新聞のために知識が必要ですね。」

僕：「もちろん、でも自分のイメージを作ることができたらお母さんと教師と家族の人から日本文化を教えてもらえるから、考えずにそんなイメージを作れるでしょうね。」

田中さん：「外国語の勉強をしたら自分のイメージを作ることは楽しいですね。」

僕：「だけど自分にとってイメージを作ることは楽しくなくて必要なことです。」

橋さん：「どうして必要ですか。」

僕：「日本人の考え方と日本語の使い分けを分かるために必要です。」

私にとって昔話とは初めて易しそうな子供のための話だけではなく、最近深い意味があるし、複雑な日本語を使われるんだ。まずレポートを書く前に昔話は日本語学習者に一番難しい日本語文と思ったけど、ディスカッションしてから隣の人からイメージを作れるためにインフォメーションをもらうはずだ。その上に田中さんには楽しみして外国語の勉強の方法だけど、自分は適当な日本語の使い分けのために必要な方法だと思う。

ワークショップの前に思ったよりすごい経験と機械だった。そんなにいいレポートを書けないと思った。細川先生と早稲田学生に感動の言葉ありません。日本語教育によるしくをお願いします。

5. 物の怪姫

アイサ

もののけ姫は映画館で千九百九十七年に出来たはやお・みやざきのアニメだ。

話は室町時代に隠す村でアマタカという村人がたたり神から攻撃された。アシタカは動物を殺したが、変な病気から汚染された。彼は村を出なければならない。これから冒険が始まる事が出来る。

私にとって、それぞれキャラクターは皆違うし、悪い人は本当はないので、このアニメは面白いと思う。例えば、エボシ御前を見て悪人だと思うか、なぜ彼女は压制される人を助けて上げるか。映画のテーマはサンとエボシ御前から表される女性の戦いや自然の保護だ。犬神のモロやいのしし神の己事主やしし神は暗示的な神が沢山いると思う。

ジャメル：もののけ姫は誰も悪いのですか。本当ですか。

私：もちろん、悪人がいますが、全部悪過ぎませんよ。映画とは最後に皆良く成ります。

ジャメル：なぜそのアニメが好きでしたか。

私：アメリカのアニメとか、良い人だけ、悪い人だけいます。もののけ姫は私達の世界もっと近いと思います。例えば、なぜエボシ御前は森を切りますか。彼女は動物や人間の戦争から強くない人を守る為めです。

ジャメル：他の事がありますか。

私：あるのです。そのアニメはしんとうを暗示しています。しんとうは山の神や月の神や犬の神や自然の尊敬と聞きました。沢山の暗示があるし、みやざきはしんとう人だそうだ。

5.1. 結論

私にとって、もののけ姫は簡単なアニメではないのだ。その映画は沢山色々な伝達がある。主なのはしんとうの尊敬や女性の戦いなどだ。しんとうは古くて複雑な宗教も、私は日本人ではないので、それでは説明するのは少し難しいが、簡単に言えば、しんとうは自然や動物の尊敬だと思う。映画の中に三つの家族がいるが、人間と自然と動物がいる。人間には村人や文明人や変な人がいる。文明人は一番良い生活のため、森を切るが、森は動物の家だから、動物と人間は殺し合う。人間は全部破壊した時、しん神は森が又咲いた。多分、しん神は人間の中に良い何かがあると思っているかもしれない。

6. サッカ - と私

ヤン コフィ

6.1. 動機

フランスでは一番人気なスポ - ツはサッカ - である。だから、私はこのスポ - ツについて関心を持っているのは当然である。

子供の時に、テレビで試合を見て楽しかったと思ったのでやってみたかったが住んでいた場所の回りに公園がなかったし、若すぎたし、サッカ - できるまでに待たなければならなかった。引っ越してから、やっとサッカ - やり始めた。もちろん、とても下手であったけど私の唯一の目的は遊びであったから問題がなかった。十二歳になってクラブに入った。二年間幸せばかりであった。皆の社会的環境は違うのに、よい関係が作られた。そのチ - ムで上手でも下手でも重要じゃなくて必要なのは楽しむことであった。それに、とても内気である私はサッカ - のお蔭で性格が変わって精神的に強くなった。フィールドに立つと、自信が持っているような気がする。けれども、フィールドの外で自信が少しだけ増加した。残念ながら、三年目の時、障害に直面した。なぜなら、二年連覇を成しとげたから、チ - ムの評判は段々増えてくるにつれて、激しい競争は登場した。ある相手の態度が変わって傲慢になって良いサッカー選手を証明するために、彼らは個人のプレイをしてしまった。しかも、あまり上手じゃなかった選手を無視したり叱ったりしていた。従って、この嫌な雰囲気のでクラブを出ることにした。私は皆がただのゲームとしてサッカ - と見なすと思っていたがすっかり誤ってこれから異なっ

た目でサッカーを判断した。ところが、サッカーが永遠に好きで同じ楽しみでやり続けるが公園だけでやってる。

年を取って今まだ家にいる子供の中に私は年上で妹と弟に対して責任がる。面倒を見ることは大変である。その上、妹と弟は反抗期に入っているから命じると断ることがある。その為、緊張がたまる。この悪いことを忘れるようにサッカーはいい手段である。

私にとって、サッカーは主に楽しみである。子供から今までそう思っている。しかし、激しい競争があるとこの楽しみは消えがちかもしれないと思っている。そして、サッカーは遊びだけでなく、悩みから逃げられるような出口である。

6.2. ディスカッション

信頼について

すみれさん：今自分がサッカーをしていていい事はどんな事ですか。

私：自信が持って強くなるような気がします。私はフィールドに立つと自信があります。サッカーをしないと緊張しています。フィールドの外でちょっと内気で話しにくいです。サッカーをする時、不安が消えて強くなります。

鹽谷さん：他の人はスポーツをする時どんな感じがしますか。

すみれさん：柔道をする時、集中しますから悪い事を忘れず。すっきりして現実に戻ります。

すみれさんの意見と私のはだいたい同じである。サッカーをするのは問題を忘れられる。そのお蔭で自信が持っている。

人と関係について

私：みよさんはテニスをする時何が好きですか。

みよさん：ダブルスするのが好きです。ペアはどこにいるかすぐに分かって話す必要はありません。

私：サッカーをする時、ゴールを決めるとか、決めさせるとか以外に、好きなのはワンツーです。同じ人にパスをしてボールはすぐに取り返すのは気持ちがいいと思っています。

スポーツのお蔭で、いい関係が作られる。サッカーは違う人を集めるスポーツで、境と不平等を消す。

競争について

私 : テニスをするのは楽しみの為だけですか。

みよさん : 私にとって、一番大切なことは楽しみですけど競争は少し必要だと思っています。クラブでテニスをしましたから上達するために、健全な競争が要ります。

私にとって、サッカーはゲームだから競争が嫌いけれども、みよさんの立場が分かる。いい競争は、皆で一緒に上手になるということである。悪い競争は集団の和を壊すと思っている。

6.3. 結論

私にとって、サッカーは大切な事である。初めには、ゲームであったが、今はまだ遊びでも、必要になった。サッカーのお蔭で 自信が少し持ってきた。フィールドに、相手は信頼してくれるからである。日常生活で、内気なら、関係を作るために、もっと難しいだと思っている。サッカーをすると、言葉は要らなくて、いい関係が築いてフィールドの外でこの関係は続く。他の事は、日常生活の問題を忘れる世界である。皆さんはテイスカッションの時、 スポーツについて、賛成であった。

6.4. 終わりに

大学の外で日本語でめったに話さないのので、このワークショップは日本人と話す機会であった。本当に面白くて皆さんはとても親切であった。そんなに短かったのは残念であったけど、いい経験になる。皆さんと細側先生、ありがとうございました。

7. 家庭教師の力

高屋 すみれ

7.1. 動機

「すみれ、この数学の問題の解き方教えて。」 高校三年生の時だった。同級生のMさんは数学が苦手で、分からない問題だらけ悩まされていた。私は、彼女が一番分かりや

すいように解き方を教えた。解き方が分かった瞬間、彼女の表情が変わった。その表情には感謝と小さな幸せが表れた。これが私にとって教えることの始まりだった。私はあの時こう思った。

「人って、こんな単純なことで『ありがとう』って行ってくれるんだ」。

この出来事があったから、私は家庭教師をしようと思った。私にとって家庭教師とは、ただ知識を伝えるだけではなく、相手に一番理解してもらえるように教えることだ。

私は、小さい頃、勉強が嫌いだっただ。今、考えると、その最大な理由は、今までの先生たちが面白い教え方をしてくれなかったからだろう。だから、私は、自分の生徒には勉強の楽しさを知ってもらう為に、面白い教え方で家庭教師をしている。

私は、主に、フランスの現地校に通っている日本人の小学生にフランス語を教えている。その中でも、ちゃんとフランス語が話せないまま小学校に入ってしまう子供が多い。すると、言葉が分からないため、学校生活が面白く感じなくなり、フランスという国を嫌ってしまうことになる。そのようなにならないため、私は一生懸命に家庭教師をして、子供たちにはもっとフランス語も勉強も好きになってほしいと思う。その上、子供というのは純粋で、傷つきやすいから、一人一人の子供の個性を見抜いて、その子に一番合った勉強方で伸ばしてあげたいと思っている。

そうすると、『本当の自分』を忘れてしまうくらい、『先生』という役にのめり込んでしまう。そういう自分を見るのが好きだ。それに、子供に教えることによって、自分自身にも勉強になり、自信が出る。私は、子供たちの純粋さに引かれ、もっと多くの子供に家庭教師をしたいと思っている。子供たちには大きくなっても、『フランス語を続けたい』や『勉強が楽しい』と思ってもらいたいので、頑張って教え続けたいと思っている。

7.2. ディスカッション

Q1： 家庭教師経験はありますか。どのような経験でしたか。

ヤンさんは英語を少し教えた経験があります。彼はあまり教えるのは得意ではないと言いました。一生懸命教えたつもりだが、相手は上達しなかった。けれど、それは生徒の方が努力しなかったせいだったと言った。ヤンさんはこのことについては、あまり良くない経験だったと言いました。

クッキーさんは会話の先生をしたことがある。でも、生徒の方は、会話ではなく文法を習いたかった。クッキーさんは工夫して、文法のポイントも入った会話の授業をした。

三ヶ月で成果があった為、クッキーさんは満足だった。とても必死だったと言う。こういう良い経験があったから、今、クッキーさんは教師になろうと思っている。

人それぞれ教えた経験があり、その経験の結果で、教えることが向いているかどうか分かる。そして、将来、『教える』という任務がある仕事に就きたいか就きたくないかがはっきりしてくる。

Q2： 教えるとしたら、子供に教えますか。大人に教えますか。

ヤンさんは大人の方が教えやすいと言いました。その理由は大人の方が落ち着いていて、まじめだからだそうです。大人だとすぐに分かってくれるからだそうです。

私は子供の方が教えやすいと思います。私は、子供の純粹さに惹かれました。子供の方が素直だから教えやすいと言いました。例えば、子供に好かれるか、好かれなからで、すぐに自分の教え方がその子に合っているか合っていないが分かります。

大人か子供かという問題は、好みの問題だと思います。ヤンさんはとても落ち着いた人なので、大人の人とコミュニケーションが取りやすい気がしました。

Q3： 今大学で勉強していることをいつか教えたいと思いますか。

ヤンさんは今、日本語を大学で学んでいます。三年生のとき、とてもよい日本語の会話の先生がいたと言う。二年生の時と違って、本当に楽しい授業だったそうだ。その先生の教え方は、上手だったと思っただけ。でも、ヤンさんは以前の経験もあり、恥かしがりやな性格なので、教師は向いていないと思っている。教える時に、何から始めたら良いのかが分からないと言っている。しかし、いつか、機会があれば、日本語教えてみたい、自分を教師として試してみたいと言いました。

私は始めて教えた時は、不器用でもいいから、とにかく教えてみようと思った。教えるうちに、上達すればいいと思いました。

教えることが向いている、向いていないは、性格の問題でもある。私は、あまりシャイでない分、最初の一步は積極的に行く方だ。

7.3. 結論

この動機を書いていた時は、誰でも教師になれるんだと思っていました。ところが、ディスカッションを進めていくほど、そうではないと気づきました。人には、それぞれの個性があり、性格があります。ヤンさんの場合、いつもシャイで、彼は自信があまりない、他人とコミュニケーションが取りにくいと言っていました。『教える』ということは、皆ができることではないということが分かりました。私は、軽い気持ちで、自然に教えることができます。それは、他の人にとって、とても難しいことなのです。私にとって簡単ということは、『教える』ことが与えられた小さな才能なのかもしれません。その才能を少しずつ磨いて、もっと良い教え方をしたいと思っています。

7.4. 終わりに

この6日間のワークショップはとてもよい経験になりました。皆さんとお話をしたり、検討しあったりできたのが楽しかったです。塩谷さん、クッキーさん、三代さん、ヤンさん、そしてシモンさん、お世話になりました。どうもありがとうございました。早稲田大学の皆さん、日本語の教師を目指して、これからも頑張ってください。

8. 仕事が好きな理由

シモン

8.1. 動機レポート

私は最近マドレーヌにあるエディアールと言う店で働き始めた。始めてから日が浅いのでまだ完全に仕事ができるわけじゃないけれども私はこの仕事が本当に気に入っている。

日本語を勉強しだしてから3年が通り、そろそろ日本語を使った有意義なアルバイトをしたいと思ってであったのがこの仕事だ。

エディアール店は日本人の観光客が多く利用するお店にもかかわらず、これまで日本語を話せる店員は一人もいなかった。そこで今回店長が学生の私をわざわざパートタイムで採用してくれたのだ。

私は主に紅茶部の販売を担当している。観光客にとってお茶は持ち帰りに軽くて、日本人と限らず大人気である。またエディアールではヨーロッパでしか購入できないお茶も置いてあるので日本人は私がびっくりするほどたくさん買って帰る人もいる。私が特に嬉しい瞬間は日本人のお客さんが私が日本語話せるとわかるとほっとしたような顔をしてニコニコにあるときだ。私はこのお店でどんどん役に立ちたいと思っている。

もともと他のお店でも店員の経験がある私にとってエディアールの仕事が特に気に入っているとすればやはりそれは売っているものに込める感情、自身からだろう。

小さいときからお茶をたくさん飲む家庭で育ったので、紅茶に対する思い入れは人一倍深い。かといってマニアではない。それでも自分が本当に好きなものを売るときは気持の入れ方が違う。

エディアールには世界中から色々な「性格」を持った紅茶が何百と届く。私はそれらをすべて把握しなくてはならない。時々お客さんからも紅茶に関する知識を学ぶ。私の上司はこういう知識をすべて知り尽くした人で、その量の多さにはびっくりする。

でも、残念なのは彼の知識が日本人観光客の前では活かされないことだ。日本から憧れのパリに旅行に来た日本人観光客に、エディアールはとてもフランスらしいお店に見えるようだ。しかしながら彼らはフランス語が分からない。適当に紅茶の匂いだけを嗅いで、よく分からないまま適当に大量に買っていくお客さんが多かったようだ。

ところが私が働き始めたので、こうしたお客さんにより良い助言をすることができるようになった。簡単な翻訳をお店に出したりし始めている。

今後の課題はすべての紅茶の説明が書かれたパンフレットを日本語に翻訳することである。責任があると共にやりがいのある仕事を担われることを誇りに思っている。

8.2. デスカッション

仕事の日本語は友達との話しと何が違うか。

すみれ；日本人のお客さんには、私の顔は日本人なので私の日本語が完璧ではないと怒る。日本人の友人にかんして安心だ。友達は着たいあまりないから。

シモン；僕には反対だ。フランス人だからお客さんはあまり期待なくてみんな僕がちょっとだけ日本語できるのは喜ぶ。ただ、辛いのは、僕はきちんと自分の気持を表わせない。時々失敗だ。

ミヨ；僕は塾の教師の経験があります。学生は素直で純粹なので楽しかった。後は教育専門に決めた。

すみれ；アルバイトを選ぶとき自分の才能を生かせるアルバイトにします。私は日本語とフランス語両方できるので販売をしても通訳をしても私の使う国語を使えるアルバイトにします。役に立つと感じるし、もっと自身を持てる。

しおや；旅行会社に勤めてました。給料は高かったが、毎日毎日忙しかったので辛かった。後でアメリカに行って二年間の留学できた。大学で日本語を教えた。

8.3. 結論

色々な理由で人によると、仕事を選ぶ。僕としては一番大切なことは僕の才能を生かせるアルバイトだっても専門を使いたい。そうすると自身と自慢が出来る。辛い生活のレシープだと思う。

9. 抹茶ソフトクリーム

ティタ・ツベトコビッチ

9.1. 動機

緑茶は東アジアの国にしか出来ない。東アジアの国の中には緑茶から料理を作る民族が多い。その料理を食べてみたら、緑茶は調味料ではなく、むしろ必要な材料だということを良く見えると思う。例えば、抹茶から作ったソフトクリームの場合は、緑茶を入れない時は普通のバニラソフトクリームである。

私はたいてい甘いものが嫌いなのに、抹茶ソフトクリームが大好きである。なぜならば、甘い味よりも苦い味があるからだ。その二つの結婚はおかしくて、本当に中毒だと思う。

抹茶ソフトクリームを初めて食べたのは四年前である。その頃は他の日本料理も初めてだったので、抹茶ソフトクリームが一番強い印象ではなかった。

次に、去年は私は抹茶ソフトクリームをおいしく食べたが、幸福の重要な要素ではなかった。しかし、パリに帰ると強い印象に残った。というわけで今年には日本に行き、すぐ抹茶ソフトクリームを買い、ベンチに座り、幸福を感じていた。そのまるで幸福式は毎日五分以上かかった。

ただし、私の「抹茶ソフトクリーム式」は食べるための時間だけではなく、他の理由もある。まず、時間を止め、環境に離れずに、客観的な見方が出来るというわけである。それで、私の好きな忙しすぎの日本をゆっくりするのは幸せである。

日本以外は抹茶ソフトクリームを買わない。だからこそ、抹茶ソフトクリームは日本だけの幸せだというのが良く分かる。いったん買わなかったら、もう私は日本でいないと感じている。

日本の生活の短い時間を攻め取るのは難しい。私にとって、抹茶ソフトクリームは日本を感じるきっかけになる。だからそれは緑の幸せである。

9.2. ディスカッション

リラックスやゆっくりする時

れい「京都では毎日何時頃抹茶ソフトクリームを食べましたか」

私「授業が本当に忙しかったから、抹茶ソフトを食べるのは授業の少しあとでした。」

れい「何時でしたか。」

私「午後五時でした。」

れい「場所はベンチだけでしたか。」

私「他の公の場所もありましたけれど、普通は私はゆっくり食べるのが出来る所でした。」

れいさんは抹茶ソフトクリームは一日中のリラックスのイメージがあるだろうかという話を私とした。

今の思い出

私「その時は現実や時間と気持ちの関係を探しました。」

れい「抹茶ソフト以外はその関係を感じるものもありますか。」

私「はい、あります。例えばプルストのマドレンというケーキです。」

れい「分かりました。思い出のことですね。」

私「でも、私の場合は現実の思い出を忘れないように良く感じることです。写真撮ってすぐ見ると同じ感じです。」

社会学

れい「ティタは日本文化に興味を持ちますね。抹茶ソフトと日本文化はどんな関係がありますか。」

私「まず、ベンチに座って、人を見ているのは社会学と関係があるかもしれませんが。それから私は日本が大好きです。全部好きです。いいものも好きだし、悪いものも好きです。」

れい「例えば、いいものといえば、どんなものですか。それから悪いものはどんなことですか。」

私「いいのは正しさです。それは町でも良く見えます。街角もきれいだし、人もていねいです。それから悪いのは浮浪人とかやくざとか不景気の問題とか、全部好きです。本当の恋愛ですから。」

れい「でも、ティタはパリで住んでいますから、パリも好きですね。」

私「実はコーヒーが嫌いだし、パリも嫌いです。」

その部分の話では抹茶ソフトクリームは社会学の観察だろうというディスカッションをした。答えは抹茶ソフトクリームはバーガーやコーヒーと同じ意味である。そのものは本場で食べたなら、観察の道具になるのが出来る。

気持ちの関係の説明

れい「どうして日本が好きですか。」

私「気持ちですから、説明できません。」

れい「勉強を始めた時はどんな興味がありましたか。」

私「まず、おずの映画を見て、日本はエキゾチックな国だと思っていました。」

れい「それからは段々興味が色々ありましたね。でも、どうしてですか。」

私「そうですね。全然分かりません……正反対が多いですから。いつでも反対と一緒に生活します。例えば、大都市で非常ににぎやかな店がいっぱいある道のすぐ隣は静かな神社があります。それから伝統と現代性の反対があります。抹茶ソフトもそうでしょう。伝統的な緑茶と新しいソフトクリームの反対があるし、甘い味と苦い味の反対もあります。」

9.3. 結論

私にとって、抹茶ソフトクリームは日本の象徴である。私は日本で楽しんで、私の日本に生きる時間が早くなるというのを恐れている。抹茶ソフトクリームでゆっくり自分の日本の生活を実感する。そのうえ、私には抹茶ソフトクリームは社会学の観察の道具である。だからリラクスの時間と同時に、正反対の面の実在と悟る時間である。

9.4. 終わりに

「考えるための日本語ワークショップ」は非常に良き体験だった。授業でパリ大学の生徒は早稲田大学院生と一つ一つテーマを決め、私達の一人一人の作文の問題を解いた。その方法のおかげで私は日本語の作文に自信が出来た。「皆さんにどうもありがとうございます。」

10. ロジックの問題と私

ウアング・ミシヨール

10.1. 動機

ロジックは興味があって珍しいテーマだと思います。例えば、AもBも本当だったら、AとBは本当でしょうね。しかし、もしAは「寒いです。」で、Bは「この文には漢字が四つあります。」だったら、AとBは「寒くてこの文には漢字が四つあります。」です。だから、この例に、AとBはうそです。これはパラドックスです。Bは「天気が悪いです。」だから、AとBは本当からです。他の例が「私はうそを言っています。」です。この文はうそなら、私は真理を言っています。それから、「私はうそを言っています。」の文は真理です。真理なら、私はうそを言っています。。。実は「私はうそを言っています。」の文はうそかどうか決められません。

生活には役に立つのですか。時々、決められないことがあると思います。例えば、せんそうが悪いのですか、良いのですか。人とシチュエーションによって違うので、答えられません。そして、時々、ディスカッションが必要ではありません。

ロジックは考え方と同じだと思います。ロジックの中にも言語の文法の中にも規則がありますから、ロジックは便利だと思います。よく覚えませんが、高校生の時、数学とロジックが好きでした。

どうしてロジックが好きになったかよく分かりませんが私にとって、ロジックは机の上の事しかではありません。

10.2. ディスカッション

私 : 「ロジックが机の上の事しかではない」について、どう思いますか。

うしくぼ : それについて、生活に必要ではありませんと思います。

私 : 意見をそんけいしますが私に関係があります。例えば、法律の中に規則があります。その規則は人が人間に作ったから、人のロジックがあります。良いかどうか分かりませんが、時々、問題があります。例えば、お金の問題。

うしうぼ : なるほど。しかし、そんなに考えません。

私 : 私にそれはいいです。

チャン : ただしさをどう思いますか。例えば、おうだん歩道で青い車の信号であれば渡ります。ロジックではありませんね。規則の反対ですから。ただしさではないでしょう。

私 : 危ないではなければ問題ではないでしょう。ロジックと規則は時々少し違います。でも、ふだんは規則はロジックみたいです。

チャン : しかしただしさだかどうか答えません。

私 : 答えられません。いつも同じではありません。

うしくぼさんとチャンさんの考え方と私の違います。分からせるためにできるだけそのロジックを使います。

評価したことがありましたか。

チャン : 私は人のロジックのただしさを評価するのは悪いと思います。どう思いますか

私 : 他人の自由をそんけいしますから人のロジックについて悪いかどうか考えません。しかし、悪ければ、評価しなかったほうがいいです。

うしくぼ : 評価したことがありますか。

私 : 評価したことがあります。

チャン : 悪いのですか。

私 : 他人が同感ではないでしょう。悪いかどうか分かりません。

チャン : むかつく！はっきり答えなかった。

日本でそのテーマ、ロジックの問題を説明するのは難しいと思います。日本語で話す時に、パラドックスを作られますから。

10.3. 結論

私にとってロジックは机の上のことではありません。話す時にパラドックスのように答えられます。例えば、はっきり答えて出来るでしょう。

10.4. 終わりに

ばっちりそのワークショップが面白かった。例えば、説明するのは、日本語で、新しかった。それに、ディスカッションは、楽しかった。ゲームみたいからだと思います。

11. アイデンティティーの問題

アン・オクチョン

11.1. 動機

7年前に私はフランスに来た。そして2年間学生として一人暮らしをした。その時は私の国の韓国にぜんぜん愛着を感じていなかった。

パリの自由な町の風景がとても好きだったし、フランスについては何も分からなかったから私にとっては毎日が新しくておもしろかった。しかしそんな生活も2年ぐらい。

その後偶然に会ったフランス人と結婚し、今からはずっとフランスで生活しなければならぬと思うと逆に韓国がとても懐かしくなった。それで韓国に帰ると前はぜんぜん感じなかった強い何かを感じるようになった。

でも3歳の息子は大人になると自分のことがはっきり分かるか、私とは親子の関係なのに文化的に距離はなく普通の家族の関係ができるかということに気になった。

私にとって、アイデンティティーの問題は「私の中のもう一人の私の問題だ」と言うのは他人が判断する私の見かけの問題じゃなくて、私の内部にある本然の私がどう思うかという問題だ。

11.2. ディスカッション

新井 : いつからアイデンティティーの問題に関心を持ち始めましたか。

私 : 韓国に住んでいた時は同じ文化と言葉を共有する人たちに囲まれてずっと生活したからこれがぜんぜん問題にならなかったんです。

フランスに来て他の人から「何人ですか。」と聞かれて「私は韓国人です。」とはっきり答えました。でもいろいろな国から来たいろいろな民族がフランスの領域に住んでフランスという国家を構成しているのを見て、書類上には簡単だけど実はもっと深く複雑な問題だと思うようになりました。

そして3歳の息子が大人になると自分のアイデンティティーの問題で悩むかもしれないと思って。

新井さんもやっぱり日本ではこのような問題を気にならなかったが、イギリスに留学した時「自分は日本人だ。」ということがはっきり分かったと言う。だからこの問題を考えるようになったのは環境の影響があったと思う。

いろんなケースについて話して見たが、今回は代表的な二つの例をあげて考えて見る。

例1 . ハーフの場合

新井 : ハーフの場合はどう思いますか。

私 : 息子はフランスに生まれて両親の一人がフランス人だからフランスの国籍を持っています。フランスに住んでいるが、うちの中にはフランスと韓

国の両国の文化と言葉が共存しているから他のフランス人よりは韓国のことをもっと分かると思います。でもやはりフランスの文化になれてるから自分をフランス人だと思う可能性が多いと思います。

例2 . 両親は外国人でフランスに住んでいる人の場合

新井：どちらかと言うのがもっと難しい場合だと思いますが、両親が日本人でフランスに住んでいる人は？

私：見た目は日本人だけどフランス人と考え方とか文化を共有しているから自分をフランス人だと思うかもしれません。でもこんな人の場合は家の内と外が日本とフランスの二つの軸ではっきり分けられているから両方の文化に慣れて何人だと言うのが難しいと思います。

新井さんと話し合った結果アイデンティティーの問題はそれぞれの個人の気持ちの問題じゃないかなと思うようになった。

新井：例えば、二人がA国で同じ20年を住んでいます。一人は20歳から40歳まで、もう一人は生まれてから20歳まで住んでいるとしたらこの人たちは自分を考え方法がどうだと思いますか。

私：同じ20年を住んでいたとしても自分を考え方法が違うと思います。前者は自分のことをA国人とは思わないが、後者はA国人と思います。

だから初めて接した言葉と文化を共有する人のグループに属すると私は思う。

11.3. 結論

アイデンティティーの問題は何人かという問題ではなく、若い時にみんなが一回ぐらいは悩む問題だと思う。私にとってはフランスを構成している国民の多様性がこの問題について考えるきっかけになった。それで今回は二つの文化に慣れている人が自分のことをどう思うかということについて考えてみたが、この問題の結論は簡単に言えないと思うので、つまり私の中のもう一人の私に聞いた方がいいと思う。

11.4. 終わりに

まず、この日本語ワークショップのためにフランスに来たみなさんありがとう。

授業を始めたばかりの月・火曜日は何について書いたらいいかというのをぜんぜん分からなくてこの一週間ちゃんとやっていけるかなと心配しましたが、今終わりにを書いているのでほっとしています。

私が考えていることを一応書いといて他の人とこれについてディスカッションしながら書き直す授業だったが、正直に言って、私が書いたレポートをみんなの前に読んで分からない部分を聞かれるのは辛かったです。でも本当にいい経験だったし、勉強にもなりましたので、みなさんに感謝しています。

ありがとう！！

パリ第七大学・日本語ワークショップ参加者一覧（順不同）

コーディネーター

細川英雄

パリ第七大学

ギョーム, ジョリー・オダン, ジャメル・ラバイ,
ジェレミー, アイサ, ヤン・コフィ,
高屋すみれ, シモン, ティタ・ツベトコビッチ,
ウアング・ミシヨール, アン・オクチョン

早稲田大学大学院日本語教育研究科

崔允釋（リーダー）, 森元桂子（記録・サポーター）,
中川真由美（記録・サポーター）, 田中里奈（リーダー）,
武一美（サポーター）, 橋本弘美（記録・サポーター）
サーシャ（サポーター）, 尹菊姫（リーダー）,
塩谷奈緒子（記録・サポーター）, 三代純平（記録・サポーター）,
張珍華（リーダー）, 新井久容（記録・サポーター）,
小間井麗（記録・サポーター）, 牛窪隆太（記録・サポーター）

パリ第7大学

ワークショップおよび特別講演会報告

講師 細川英雄先生

根来良江*

バカンスも明け、新年度はじめの、9月2日（於パリ第7大学）、6日（於パリ日本文化会館）の両日、早稲田大学の細川英雄教授を講師に、講演会が開催された。

細川先生が現在早稲田大学の日本語研究教育センターで担当されている授業の中に「総合」というタイトルの授業がある。これは細川先生の言語教育理論をそのまま体現したような画期的な授業であるが、実はこの理論に基づき、9月はじめにパリ第7大学の学生を対象に1週間にわたってワークショップが行われた。講演会はこのワークショップの合間に行われ、講演会の1日目には、これらの活動の前提となる理論的枠組みについて、そして2日目には、主にその実践面についてお話し下さった。講演会のテーマは、それぞれ「日本語教育と日本事情 - 言語文化教育の意義と問題 - 」、「ことばと文化を結ぶ日本語教育 - 総合活動型言語学習の理論と実践 - 」である。報告者は、細川先生ならびにパリ第7大学の太田先生に特別ご理解を得て、パリ第7大学でのワークショップにも参加させていただいたので、その感想も含めて、以下、先生のハンドアウトにそって報告したいと思う。

*パリ第7大学日本語講師

1. 「日本語教育と日本事情 - 言語文化教育の意義と問題 - 」 (9月2日の講演会より)

今日、現場で「日本語教育」と「日本事情」といえば前者を言語の教育(日本語の語彙・文法・発音・表記の知識・能力)、後者を文化の教育(日本の社会・文化の知識・情報)としてとらえるのが一般的理解だろう。テーマにもある「言語文化教育」というのは先生がこれらふたつを結び、命名されたものである。では、このふたつを結びつくとはどういうことなのか、またどう結んだらいいのか。この日はこれらふたつの関係を歴史的にさかのぼっておさえ、そこに何が見えるか、ということでお話し下さった。

まず年代として1960年代から現在をとりあげ、この間に「日本語教育」と「日本事情」のタイプがどう変遷したかを考えると、この時代は、60年代から70年代()、80年代()、そして90年代以降()と、大きく3つに分けることができる。以下それぞれを見ていく。

60年代から70年代：主に「何を」教えるかという教育内容に注目した時代。言語の教育は「日本語学」として体系としての知識を伝えることを目標に行われていた。そのため、「日本語の文法をどう説明するか」が中心課題であった。また、文化教育としては「日本学」があり、日本に関する専門知識をどう教えるかが注目された。学習者のニーズは「日本に関する専門的な研究をしたい」というものであった。この時代、言語教育、文化教育は関係なく別々に行われていた。

80年代：「どのように」教えるかという教育方法に注目した時代。言語教育では「日本語」の教育としての側面が注目されはじめ、コミュニケーション能力を獲得するのが目的とされはじめた。文化の教育として「日本事情」という言葉が広く使われだしたのもこの年代である。ここでは日本の社会・文化について、教養的知識を得ることが目的とされた。学習者のニーズは「日本に関する一般的・教養的な知識を得たい」等で、一般的なことを広く浅く学ぶため、効率性、円滑性、到達性などが重視された。言語教育はこの時代、知識重視から能力重視へと移行してきた。文化教育ではなお知識重視にとどまっているが、内容的には専門的なものから一般的な行動様式へと変化があった。

90年代以降：「なぜ」教えるかという教育関係に注目しはじめる。ここでは教室内における教師と学習者の関係、言い換えれば、なぜ、教師が学習者に社会・文化を教えなければならないのか、ということにも考えが及ぶ。相互性・協働性(ひとつのものをいっしょに作っていく)・合意性(合意のもと何かを教室活動として行っていく)が重視され、ことばと文化の統合が見られるようになった。細川先生が自らの立脚点としていらっしゃるのはここである。ことばと文化は統合され、「言語

文化教育」が行われる。ここでの目的は「問題発見解決能力」の開発であり「文化能力」というものが考えられる。

以上年代別に3つのタイプについて説明して下さったが、前時代のものの反省として次のものがおこってくるため、完全に前のものが次のものにとって代わるわけではなく、現在もなおこの3つは共存している。ただ、教師として自分はどの立場に立つのか、そしてそれはなぜなのか、これをはっきりさせることが大切、とのことであった。

次に先ほど言及した「文化能力」とは何のことかについてお話があった。これを考えるには「社会」をどうとらえるか、また「文化」の境界とは、そして「文化」はどこにあるのかについて考えていく必要がある。

まずひとつめの「社会」だが、これを考えるとき、我々は個人<家族<地域<民族<国家<地球といった「単位」を考えがちである。しかし「社会」という枠組みがあってその中で個人が活着しているわけではなく、実は我々は「個人」の認識・価値観による、イメージとしての「社会」の中で活着しているといえる。これは今までのとらえ方をくつがえす新しい視点といえるが、確かに個人がどんな社会イメージを持つか、それによって行動がなされていることを思えば納得のいくとらえ方である。これによると例えば日本社会に住んでいる人はみな同じ、とはいえないことになる。さて、そうなると次に「文化」はどのように捉えたらいいのだろうか。「社会」をこのように考える以上、「社会・文化」をセットとして体系化してとらえることは不可能になる。教科書に出てくるような「平均的日本人」としての「文化」さん、つまり「日本人」の行動様式・思考様式は個と個のコミュニケーションでは意味を持たなくなってくる。コミュニケーションで重要なのは、社会集団「傾向」の「解釈」としての「文化論」を知ることではなく、個と個が相互に交流しあうことである。個人の顔が見えてこないようではコミュニケーションは確立しない。たとえば、我々は「日本人だから」「フランス人だから」友達になるわけではない。

それでは「文化」はどこにあるのだろうか。仮説として先生は次のことをあげて説明された。「言語能力」という場合、「言語」に能力があるのではない、なぜなら「言語」は主体になりえないから、ということを考えれば、「文化能力」ということを言う以上、「文化」は「社会・集団」の中にあるのではない、集団は能力になりえないから、ということがいえる。「文化」とは個人一人一人の中にある認識・判断・表現の総体であると同時にその個人の思考・表現の様式や能力である。つまり、「文化」は「個人」の中にある、ということになる。「文化能力」の主体は「学習者」にあるのである。

「文化」の認識主体を学習者自身とすると、おのずから、学習者の対象認識とその言語化が注目される。個と個のコミュニケーションでは「個の文化」としての自己の立場を形成していく必要がある。ある個人が何かを見て、認識し、思考し、表現をする。この連鎖を教室活動で作っていくこと、これこそが、「文化能力」を形成していくことではないか。ではどうやって、教室活動でその場を提供するか。これを実践しているのが、今回のパリ第7大学でのワークショップの原型である、細川先生の早稲田での「総合」での授業なのである（詳しい内容については後述の6日の講演内容報告参照のこと）。

今までの日本語教育・日本事情教育というふたつでセットのやり方をこえ、こうして先生の提唱されている「言語文化教育」が生まれた。今までのいわゆる日本文化の知識を表面的に学ぶような「日本事情」は解体し、その上にくるものとして「言語文化教育」は存在する。今までは日本事情としては、例えば「歌舞伎」など主に教える側が選んだ事項が教えられていたが、そうではなく、「なぜ」自分（学習者）が歌舞伎について学びたいのか、それを学習者が自分で考えて表現できる能力を日本語教育で培うべきではないのか、というのが先生の立場である。「日本語教育」とは自分の言いたいことを自分で相手に表現できるようにすることであるのだから。これは今ある、傾向・特徴を知るものとしての「文化論」を否定するものではない。ただし、それのみを知っていてもコミュニケーションはできない。いわゆる「文化論」をコミュニケーションの入り口として身につけている必要はないのである。先生のおっしゃる「言語文化学習」とは、思考（こころ）と言語（かたち）の往還により、対象と自分の関係を語り、他者との異なる価値観を認め合い、他者と共生していくための、世界中のどんな社会でも暮らすことのできる「強固で柔軟なアイデンティティ」づくりを目指したものなのである。

2. 「ことばと文化を結ぶ日本語教育 - 総合活動型言語学習の理論と実践 - 」(9月6日の講演会より)

先生が実践されている「総合活動型言語学習」では次の3つの考え方を重要視している。「学習者は、自ら行動し、他者との相互的協働行為を遂行する存在である」「学習者の言語文化学習は、必ずしも右肩上がりではない」「学習者は、常に一人の人間として尊重される」。ひとつめの考え方は、学習者は意思を持っている存在であり、他者とコミュニケーションしあって学習する、とも言い換えられるが、これはつまり学習者自身が考えようとしないう限りこの教育は進まないことを意味している。ここから学習の主体を学習者自身と位置づける必要性が生まれる。

それではこの「学習者主体」の日本語教育とはどのようなものであるのか。そこでは与えられたものをこなす、覚えるといった教材中心読解型の学習ではなく、自分の「考えている」ことを表現する学習が実践される。先生はこのような学習を「問題発見解決学習」と呼ばれている。この具体的な実践例として、早稲田大学の「総合活動型言語学習」の中で先生が担当されている「レポートを書く」という聞く・話す・読む・書くの総合活動型コミュニケーション活動がある。これは週に一度、昼休みをはさんだ3時間の授業で、14週にわたって行われる。また、授業には早稲田の院生もTAとして参加している。なお、今回のパリ第7大学のワークショップはこれをもっと短期間で行ったものである。この授業は以下の3つの柱を持っている。

テーマを自分の問題としてとらえられるか（ステレオタイプの剥ぎ取り）

インターアクションと自己相対化 インタビュー・ディスカッション・相互評価を通して

他者を説得し納得させるための論理と一貫性（他者と共有する論理の獲得）

講演会では、上記3つの柱が実際にどのような流れで実践されていくのかをこの授業の様子をビデオに収めたものを流して紹介して下さったので、その流れを以下まとめてお伝えしたい。

- 1) 動機メモづくり（1～3週目）：各自レポートのテーマを決める。タイトルは「と私」とつける。そしてタイトルをそれに決めた動機「私にとってその問題はどのような意味があるのか」を800字位にまとめる。これは、あとで他の人とディスカッションを行う時に必要になってくる自分の考えの立場、立脚点をここではっきりさせるという意味を持つ。
- 2) ディスカッション（4～6週目）：自分の考えについて他人（1～2人）と深くゆっくり意見を交換する。
- 3) 話し合い（6～8週目）：ディスカッションの結果をクラス（グループ）に帰って報告し意見をもらう。これはインターアクションの効果をどのように自分の中で受け止めていくか、自分にとってこのディスカッションが何だったのかを考えるきっかけとなる作業である。
- 4) 結論（8～10週目）：もらった意見を参考に結論をまとめて発表する。自分の立場を再確認し、意見をまとめる作業。
- 5) 相互自己評価（10～12週目）：2グループ合同でそれぞれのレポートを評価し合う。

なお、この授業の成績だが、出席点（3分の2以上）、レポート提出、最後の総合評価に出てコメントすること、の3つをおさえれば、大体70～80点はとれるそうである。また、文法的な面では、直接訂正（「この表現は間違っているからこう直しなさい」）は行わず、やりとりの中で間接訂正（「ここの意味が良くわからないんだけど？」）が頻用される。レポートについては、構成のアドバイスはしても、内容についての直しは行わない。学習者が使いたいと思う単語は学習者自らが辞書でひき、また使いたい表現も学習者から質問があれば、手助けする。最終的なレポートの字数は中級で8,000～10,000字位であるということだ。

以上、細川先生の言語教育理論と、それを実践に移された授業の流れをご紹介したが、おそらくまだ半信半疑の方もいらっしゃるだろう。理論はやはり実践があってはじめてその輪郭をあらわしてくるわけだが、私自身お話をうかがってなるほどその通りと思ったものの、今回ワークショップに参加し、自分の目で見てみるまでは、先生の理論に基づくこの授業がいかに大きな意味を持っているかがわかっていなかった。そこで最後に、今回ワークショップに参加させていただいた時の感想をお伝えしておきたい。

今回のワークショップは毎日午前10時から12時半まで、6日間続けて行うとはいうものの、本来なら14週の授業を1週間に縮めたものであり、果たしてそれで成果があがるのかどうか疑問であった。しかし、1週間たってみて確かに結果が出ていること、学生からの良い手応えがあったことに驚いた。これは参加した学生と話してみても明らかであった。結構ハードな一週間であったが、課題をこなしきちんとしていけたことにも学生自身満足していたようである。またディスカッションについてだが、アシスタントとして参加し、その相手をつとめるということは予想していたよりはるかに気力体力を消耗するものであった。というのも、他人からの意見を考えるにあたって、自分自身を振り返ってみることが常に要求されるからである。この時点で、これはすでに日本語の問題ではなく、お互いの関係は教師と学習者をこえていると感じた。とにかく他人との意見交換は中々辛い作業であり、これは、お互いの信頼関係が成り立っていないと出来ないとの説明があったが、まさにその通りであると感じた。今回のセミナーで印象的だったのは、授業に参加している人がみな当然のように「学習者主体」、学生をひとりの人間として尊重しているということであり、それはディスカッションの際の言葉、反応からも伺えた。こういうことは相手に伝わるものなのだろう。この雰囲気のおかげでディスカッションはどんどん深まっていった。こういう意味でも、グループにディスカッションの相手として参加する人は、理論もしっかりわかっている必要があると感じた。今回のセミナーの成功は、早稲田大学大学院日本語教育研究科言語文化研究室の、すでに経験のあ

る院生の方々がTAとして授業に参加していらっしまったことによるものも大きいと思う。学生が書いたアンケートの中に来年もまたこのセミナーをやってほしいという希望があったが、これだけの人員の確保は大きな問題であろう。これがどの機関でも可能かといえば、レベル、クラス構成、その他の要因から、これと同じ形で授業が行えるのはまれだと思うが、細川先生の言語教育理論を実践に移した授業として可能なのはこの形だけではない。実際他の授業の案も出されている²。とにかく、学生の中に存在している力、これはすでに会得した日本語の知識という意味ではなく、その人となりをなしているものという意味だが、これを信じて、それを活かすような授業を行った時、思った以上の反応がかえってくるものだということを実際にこの目で見られたこの一週間は、自分の態度を振り返ってみるのにも大変貴重なものであった。この機会を与えてくださった細川先生、早稲田の院生の方々、パリ第7大学の学生のみなさん、大島先生にこの場でもう一度お礼を申し上げたい。これを読んでくださった会員の皆様も、興味を持たれた方がいらっしまったら、今回のセミナーの様子がネット上で公開されているので、ぜひそちらをのぞいてみていただきたいと思います。コンセプトからはじまり、セミナーの一週間を逐一追って、最後学生のみなさんの完成レポートまでが掲載された大作である。なおサイトのアドレスは以下のとおり。

<http://www.f.waseda.jp/hosokawa/jissen/paris/>

【研究室注】

なお、この文章は、フランス日本語教師会への報告として執筆されたものを、石井陽子会長の許諾を得て、転載させていただいたものです。フランス日本語教師会および石井会長に謝意を表します。

² 「総合」研究会編（2003）『「総合」の考え方と方法』早稲田大学日本語研究教育センター参照

私にとって言語文化教育とは何か

徐 揚

1. はじめに

2003年4月より細川先生担当の言語文化研究の授業（以下GBK）を受講して以来、「私にとって言語文化教育とは何か」という問いは常に頭の中に置いたままで三ヶ月経ってきた。授業がはじまって間もない頃、「私にとって言語文化教育とは何か」というテーマで、一度書いたが、そのときの私は「教育観」というものはほとんどなかった。学部時代からずっと日本語を専攻し、日本に来て初めて専門的な教育の授業を受けたのである。教師の経験もない私はいきなり「教育観」を問われると頭の中は白くなった。だから、当時言えたのはただ自分が学生として経験したものを逆に考えたものだけであった。

敵意や排斥などはいつかのうちに消えていった。今の私は日本に対して一種の言葉に表現できない親和感を持っている。それは、いわゆる第二アイデンティティの確立過程とも言えるのだろう。

人と人の間の隔たりを取り除き、心を通じ合わせることは言語文化教育の役割である。だから、私にとって、言語文化教育とは、友好の掛け橋である。教師は言語文化教育を通して学習者に真実を探させる。個人個人の判断によって独自のアイデンティティの確立ができるのではないだろうか。

今から見れば、あまりにも浅くて幼稚な「教育観」で自分も恥ずかしく思う。では、三ヶ月を経た今の時点で、もう一度「私にとって言語文化教育とは何か」を自らに問うなら、今度はすこしでも「成熟」？ になれたのだろうか。

この三ヶ月GBKの授業を取りながら、日本事情の授業としても一つの「言語文化」(以下RSS)を取っていた。その授業はGBKの実践の場とも言えるいわゆる「総合活動型日本語教育」の実際行われているところである。ちょうど同じ水曜日にあり、三限のRSSではただの「学習者」なのに、五限のGBKになったら、「教師」の役割を考えなければならなくなるので、いつも身分転換で忙しかった。細川は「教室担当者は、学習者主体の理念に基づきつつ、既成の研究を実践に応用するのではなく、自らの実践の中から固有の研究を生み出すへと展開するという、実践から研究へ、研究から実践へという循環、そして、自分にしかできない実践と研究のオリジナリティこそ、言葉と文化を結ぶ日本語教育が求める姿なのだ」³と論じている。この点から見れば、自分が絶好のチャンスを得られているのではないだろう。たしかにRSSでは自分が教室の担当者ではないので、「研究」できるかどうかは疑われるかもしれないが、教室ではただの学習者ではなく、常に「もし自分が教室の担当者だったら」と考えるようにしていたので、ある意味で自分にとって一種の「実践」になったのではないだろうか。

では、本稿で二つの「言語文化」の授業に基づき、「私にとって言語文化教育とは何か」についてあらためて考えていきたい。

2. 「日本事情 言語文化」(RSS)という授業

RSSのクラスは、先生1人、TA1人、学習者7人(日本人3人、マレーシア人1人、韓国人1人、台湾人1人、中国人1人、)によって構成されている(最初の頃学習者が多かったがそのうちどんどん脱落し、今は安定した形で7人しか残っていない)。留学生の日本語レベルが8であるのを前提として選択できるクラスである。授業でやることとしては、参加者それぞれが、「日本社会に暮らす魅力ある人物」にインタビューをし、それをレポートにまとめるという作業を行う。インタビューにおいて自分が選んだ人物に対する「魅力」を深めていくと同時に、「日本社会で暮らすこととは」と「なぜこの授業は言語文化なのか」についても考える。授業外でメーリングリストを使用し、各自のレポートを提出し、ほかのメンバーのレポートも事前に読んでおく。意見のやり取りも行われる。

クラス活動は5つの段階を経る。

学習者が各自、自分がなぜ、その人に興味を引かれるか(「動機」ということについてA4一枚前後で記述する。

³ 細川英雄(2002)「ことば・文化・教育」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』 凡人社

インタビューしてその内容、またインタビューを通して考えたことをクラスに報告する。

クラスでのディスカッションを経て、自分なりの結論を出してレポートに仕上げる。

最後にインタビューを終えて、「日本社会に暮らすということ」「なぜこの授業は言語文化なのか」について記述する。

相互評価する。

評価の項目は

レポートのオリジナリティ（テーマは自分の問題として捉えられているか）

議論の受容（クラスでの議論や意見は十分に受け入れられているか）

論理的整合性（動機、インタビュー、結論の流れに一貫性があるか）

では、このようなRSSの授業で言語と文化はどんな形で存在しているのか、そして、どんな役割を果たしているのか。

3. 「言語文化」における言語とは

3.1. インタビュー

私が選んだインタビューの相手はT先生であった。当時はまだT先生の授業に一回しか出たことがなかったが、なんとなくT先生に魅力を感じ、話を聞きたくなったのである。しかし、T先生についてまったく知らなかったし、自分がうすうす感じた「魅力」はまだまだもやもや状態なので、何を聞けばいいか、どうやって聞けばいいかぜんぜんわからなくて本当に困った。これでT先生とうまくコミュニケーションができるかなと自分はすごく不安な気持ちでいっぱいであった。といっても、インタビューしなければならぬので、あらかじめ聞きたいことを一生懸命考えた。そのとき用意した質問は以下の通り。

単な履歴について

なぜ先生になろうと思ったのか？

いままで教師をやってきて一番の思い出は？

普段はどうやって学生を評価するか。

先生は生徒の人生を変えられると思う？

教師になってよかったと思うか？ どうして？

いじめ問題、差別問題について

「RSS」みたいなやり方について

教育観

今になって、これらの質問を見て、ただT先生を紹介する文章を書くための質問ではないかという感じがする。確かに、あの時は私にとってこのインタビューはあくまでも聞く 答える 記録という流れだけで、自分がこのコミュニケーションでどんな役を演じるかあの時はまだ意識しなかったのだ。

実際インタビューをやってみると、現実はなかなか自分の想像通りに行かないものだなと痛感してきた。面白い話題になりそうなところでT先生はあまり話すことがなく、言葉に詰まったときも、重点に置かなかった質問を聞いたら、すごいエピソードが引き出されて唖然したときも、そうであった。これで新しい質問をひらめいてきたり、もともと用意した質問を聞かなくてもよくなったりするようになった。そうすると、インタビューは以外な方向に展開してきたのである。(以下インタビュー一部抜粋)

徐 : 先生は生徒の人生を変えられると思う？

T先生 : 変えちゃうから、気をつけなければならない。実は、昔はそんなこと考えなかった。先生になって四五年の時、子供が真っ白なTシャツを着て、教師の好きな色で染めるのが教育だと思った。教師と子供がいろんなことをしながら、教師の自我と子供の自我を融合したりすることによって、純白な布に色を染めるイメージだったけど、いまはそれが怖いかなってあるいはそれができるかなって思うようになった。つまり、そのような色を染めるのがあなただ、あなたの責任で染めなさいと考えるようになった。

徐 : つまり、生徒が自分で自分の白いTシャツを染めること？

T先生 : そう、自分で選択して、あるいは、自分の責任をおいて、学校を通う中で染めていきなさい。教師にそめてもらうわけでもないし、国家や社会に染めてもらうわけでもない。

徐 : つまり、「私」をしっかり持つことだね。

T先生 : 自己責任だね。

徐 : すべて自己責任だったら、教師の役割はどこにある？

T先生 : ものごとや世界、現象を正確に冷静にありのままに見る力をつけさせる。

実は、「先生は生徒の人生を変えられると思うか」という質問を考えたのは、自分がずっと「考えられるのは当たり前」と思い込んでいたからである。次に「どうやって変えるべき」まで質問設定したが、「変えちゃうから、気をつけなければならない」という答えが出てきて、本当にびっくりした。だから、もとの設定をあきらめて新しい変化に応じて進めなければならなかった。その後、これについて、私はこんな文句を書いた。

「変えちゃうから、気をつけなければならない。」という先生の話はわたしに大きな衝撃を与えた。私も昔の先生と同じように、子供が真っ白なTシャツを着て、教師の好きな色で染めるのが教育だと思ってきたのだ。今振り返ってみれば、自分がかつてなぜ苦しんでいたかは確かに「すきでもない色をTシャツに染めさせられた」からではないか。こんな教育観だったら、自分がどんなに「いい先生」になろうとがんばっても、結局生徒のTシャツに自分がいいだと思ひ込む模様を染めることになってしまうだけなのではないか。

(中略) 教師は生徒を変えるのではなく、生徒の選択を応援するものである。

この問題は後になって、インタビューの最も中心的なものになって、先生の一番魅力的な点にも、私にとっても、一番ヒントになった点にもなったのである。

こうやっていつの間にかインタビューは違う方向に進展し、相手の新たな魅力点を発見してきたので、相手からの発信を受け、その場で即時に反応し、興味のある点についてどんどん質問していくのである。そうして、相手の魅力をだんだん深く掘り下げることができるだけではなく、自分が受けた新たな認識を消化してまた相手とぶつかっていくというような往還するインタアクションではじめてコミュニケーションがなりうるわけである。

3.2. RSSにおける「言語」

RSSでは、インタビューの対象が決まったら、なぜ興味を引かれたかについてまず動機を書く。書いたものをクラスで発表する。これは、決して自分だけわかればいいのではなく、クラス内のみんなに納得してもらわなければいけない。みんなからいろいろなコメントを受け、それらを納得したり、納得できない場合は相手に対して解釈して説得したりするのだ。

そして実際にインタビューをやり、聞いた話の内容をまとめてクラスで報告する。この段階で重要な点は、自分が聞いて相手がどう答えたのかをそのままに再現するのではなく、自分の考えたことも入れなければならない。つまり、インタビューの相手の話を自分の問題として捉えていかなければならない。そして最後に自分なりの結論を出す。

結論は動機と一致しているかどうかは評価の点となる。もちろんインタビューを終えて考えていたことが変化する場合もある。その場合もどのように変わったかを文章の中でじっくり説明することによって、変化していく様子がよくわかって、読者を納得させなければならない。

そのふうに、自分の考えていたことを表現して他者の意見とぶつかって、再検討、また再表現して、他者が納得してくれるまで、この過程が何度も何度も繰り返さなければならない。この過程では、自己表現も他者へのコメントもレポートを書くこともすべてクラスの共通言語・日本語を使わなければならないが、どう表現するか個人の自由で、文法の違いを直すことなど一切しない

3.3. 言語とは

GBKの授業では、細川氏は「言語」について「内言が外言されたもの」と定義していた。たしかに、われわれ人間は常に何ごとについて考える。その思考の内容や認識は内言とし、自分が他者へと伝えようとしないと、他者は永遠とわからないのだ。だから、自分は他者にとっては、逆に他者は自分にとっても同じ存在である。しかし、人間にとってはコミュニケーションが必要だから（なぜかは一目瞭然だから、ここでは省略する）何とかの形で自分の内言を伝えなければならない。つまり、自分の内言を外言化し、思考を表現しなければならないのだ。そこには言語の役割がある。ただ、伝えただけですむわけにもいかない。相手がちゃんと理解してくれたのかは問題になるから。相手も同時に相手の内言をこっちに伝えようとしているので、自分がそれを受け入れ、またさらに、自分の内言を外言化するのだ。こうしてお互いの内言と外言の往還を繰り返しながら、他者とのインタアクションによってわれわれ人間は共生を求めているのである。

4. 「言語文化」における文化とは

4.1. 「個」

T先生のインタビューのキーワードを探すとしたら、「個」はそのひとつになるだろう。

その一：

徐　　：生徒たちにもっとも教えてあげたいのは何？

T先生：周囲はどうであっても、「私」つまり「個」をしっかり持つこと。

徐：どうやって？

T先生：自分と違うタイプの人とも付き合うようにさせたりするとか。

徐：「個」をしっかり持つことがなかなか難しい。それだけでは、ちゃんと持てるようになるか？

T先生：教師の守備範囲があるので、悲観的になるわけではないけど、できることは限界がある。ただ、その守備範囲の中で、作品の意味をわかるとか、言葉が使えるようになるとかののではなくて、しっかりした自分を持つため、あるいは、国家とか社会とかあるいは特定の集団の中に自己を埋没してしまうとか、国家の願いがそのまま自分の願いになってしまうようなことがないようにしっかりした認識力、言葉の力をつけるという大きな目標をもっている。もちろんすぐ実現するわけではない。

徐：どうしてそんなに「個」にこだわるのか。

T先生：それは、僕のひとつの歴史観がある。戦前の教育は集団の中に自己を埋没させるような教育だった。自分の冷静な判断がないと、すべて国家の願いになってしまったら、批判者のない国家が危うい。

その二：

徐：差別というのは、ステレオタイプ的な見方につながると思う。たとえば、日本人はこうだ、中国人はそうだなんかの言い方はよく聞こえるね。

T先生：留学生だけではなく、われわれの中にも同じ問題がある。そういう見方がまるきり外れているとも言えない。ひとつの傾向を示している。だから、国レベルでものを見ることは別に悪いことではないと思う。ただし、それはいつも、危ういものだ、すべてではないというもう一方の意識をもてるかどうかの問題だ。(中略)つまり大きくくくれるものと少数のそれと反するものを同時に持つておく必要がある。

徐：これはつまり、ものの見方？

T先生：そう。すべての教育はどうかかわからないが、世界をどう見るかを教えるのだろうね。つまり、ものをどう見るかという勉強なのだ。教室で大事にしたいのは、やはりものをありのままに見るということだ。前提は「個」をしっかり持つことだね。

(インタビュー一部抜粋)

わたしはこの「個」にたいへん気になっていた。なぜかというと、それとほとんど同じ時期、GBK の授業でも「個」で大騒ぎになっていたからである。細川氏は「文化は個人の中にある」と指摘した。いままでは、「社会」や「文化」を語ると、これらはすべて自分の外にあるものであり、個人がその中に属するものであるというのが普通の認識と言えるだろう。しかし、考えてみると、何を「文化」と認識するかは一人一人異なり、現象をどのように捉えるかは個人個人によるものではないだろうか。中国人なら中国文化、日本人なら日本文化を背負うなんかと一概に言えるものか。中国だけでも北と南はずいぶん違うし、同じ北でも、省によっては異なり、同じ省でも、各市はそれぞれ……結局のところ、個人個人に帰するものである。だから、「文化」は個人が具体的なコミュニケーションの中で見つけるしかないものである。その見つけた「文化」自分の暗黙知であり、他者には見えないため、細川氏のいう「個の文化」である。そして、こういう「文化」は個人に内在するもので、個人の内言になるわけだから、一旦これが外言によって解釈されると、もう「文化」ではなく、「文化論」になるわけだ。

では、なぜ教育では「個の文化」を取り上げられるのだろうか。われわれ人間は常にコミュニケーション活動を通して現実の世界と関係している。そして、「個の文化」がコミュニケーション活動において「文化能力」として出現する。「私」は絶えず他者から影響を受けて自分の内言を刺激し、新たに形成された認識や判断を記述し、他者はそれを受けて消化した後また他者の外言によって表現される。以上のプロセスのように、それぞれの「個」の記述により、違う価値観や違いが出てくるわけである。そして、どうやってそういう価値観のずれや違いを乗り越えるかを問題にし、他者との共生を求めるのはわれわれにとって永遠の課題なのである。それを理解したら、わたしは、T先生の強調する「個」もわかるようになってきた。

4.2. RSSにおける「個の文化」

RSSの授業は以上紹介したように、従来のヒエラルヒーを排除して比較的平等で自由な場所だ。教材など使わずに、いつも各自が書いたインタビューに関するものだけ討論な形で行われている。そのためには、学習者は自ら主体者にならなければ、この授業が動けなくなってしまう。もちろんインタビュー対象は自分で選んだので、自分の問題として考えなければならないが、それだけではなく、ほかのメンバーはそれを読んで、「責任のあるコメント」をくれるわけだから、この問題はすでに他者と共有する問題なのである。「責任のあるコメント」という言葉はクラスの一人が言い出した言葉だ

が、大変ずばりと急所を突く言葉だから、よく言われるようになった。他人のレポートを真剣に読んで他人の問題を真剣に考えた上でないと出したコメントが無責任になってしまい、結局他者との共生も感じられないのである。

前にクラスメンバーを紹介した時わかったことだが、誰が何国人ということ思い出すには少し時間がかかった。わからないのではなく、いつのまにか意識しなくなったのだ。関心は個人の背負っている「国」概念からその本人へ転じたのは、インターアクションによって他者とも関係を見直したからだ。

5. 結論：私にとって言語文化教育とは

結局のところ、言語も文化も個人の中にあるもので、分離させようとも分離できない存在と言えるだろう。このような言語と文化を融合されたRSSの授業のようなものはこれからも要求されるようになっていくと思う。今の自分がRSSの授業で書いてきた10枚以上もするレポートを手にして確かに一種の達成感が感じられる。これはもちろん枚数によるものではなく、三ヶ月にわたってクラスで取り結べたメンバーたちとの信頼関係に基づいて自分を「最善」まで表現した成果だから、かつてなかった達成感を味わえたのである。

RSSの授業を取る前に、なぜこの授業が「言語文化」という名なのかわからなかった。そして、三ヶ月後もう一度考えると、私は、こんな文を書いた。

この三ヶ月間は、いろいろな失敗を体験してきた。書いた文に自信満々で授業に出たら、批判されて認めてくれなかったとき、他の人の書いた文に対してどんなコメントを出したらいいかわからなくて鋭く言うと相手を傷つけ、いいかげんに言うと無責任になってしまい、大変困ったとき、よく日本語で表現できなく、本当に伝えようとしたことがなかなか相手に届かないとき、難関をなかなか乗り切れなくて何時間も一字書けずパソコンの前にボウと座り込んだとき、自分を「隠す」ことに慣れていたが、ここでは絶えず「徐さんにとっては？徐さんの意見は？」と追われて、やむを得ず自分が自分と向き合ったとき、今週はやっと一区切りついたと思いきや、来週はすぐ目の前に・・・本当に辛かった。

人間は窮地に追い込まれると、立ち上がって戦うかそのまま放棄して沈没してしまうかのどっちかを選択するものだ。しかし、この授業は「窮地」でもないし、放棄しても別に沈没するわけでもないので、「やめようかな」と思ったことはないわけでもない。では、どうして最後まで残ってきたのだろうか。

たぶん、私は自分を表現しなかったのだ。そして表現した自分をみんなに認めてほしかったからだ。自分のことだから、自分がわかっているだけで、何とかの形で表現できないと、相手は自然にわかってくれるわけではない。こういう「何とかの形」というものは「言語」だ。言語の重要さは私がこの授業を通して再認識することができた。

人間は社会で生きていけるために、絶えず他人とのコミュニケーションが必要である。コミュニケーションをよく取れるために、言語をうまく利用して自己表現をしなければならない。では「自己表現」というのは、いったい何を表現するのだろうか。自分の感情？立場？思考？いや、そのすべてだ。自分の中にあるほかの誰とも違う個人専用の「文化」を表現するものである。私だけではなく、人間誰でも潜在意識のどこかで自己の文化を言語を通して表現したがつているのではないだろうか。いまになって、この授業はなぜ「言語文化」なのかについては、少しわかったような気がしてきた。

では、「言語文化」授業の意味をわかったようである以上、自分の「教育観」というものは三ヶ月前と比べてどんなにかわってきたのだろうか。ここで、もう一度「私にとって言語文化教育とはなにか」について考えてみよう。

三ヶ月前の「人と人の間の隔たりを取り除き、心を通じ合わせること」はつまり「ステレオタイプの剥ぎ取り」で、この目的は今でも変わっていない。言語文化教育の教室でやることとは、学習者たちは自ら主体になり、他者の大事な存在を感じながら、自己再認識かつ他者再認識を繰り返すことによって、自分自身に絡みつかれたステレオタイプを剥がしていく活動だと今は一歩進んで考えるようになってきた。そして、「個人個人の判断によって独自のアイデンティティ」の育成から「周りの環境によらずしっかりした自分を持てると同時に絶えず周りを理解してあげる準備をしているアイデンティティ」の育成へと将来の目標にしたい。教師はこのような教室の設計者として学習者を凌駕するのではなく、忘れかけた自分を探し戻そうとする学習者の後ろ盾となる支援者的な存在であるべきだ。と、私は今そう考えている。

6. 終わりに

自分もわかっていることだが、いくら偉そうに宣言しても、実際自分が教師として自分の教室を運営することにならないと、理念というものはあくまでの空想である。RSSの授業はGBKの実践の場と意識しつつも、私は一人の学習者にすぎない。将来私の教室

でどんな問題が私を待ちかかっているかはまだまだ未知数である。ここでは、RSSの授業で感じた問題点もすこし書いておき、皆さんと将来の自分の参考にしたいと思う。

まず、こういうRSSの授業は人数の限界がどのくらいであろうか。何人ぐらいは最高の効果があげられるのだろうか。グループに分けてTAをつけるとしても、グループの最大限は何人なのだろう。メンバー全員のレポートを読むのは決して容易な作業ではなく、それに「責任のあるコメント」を出せるために、ざっと読むことは考えられないからだ。そして、信頼関係というのは、個人個人の人格にもつながるので、個人の差がでるものだが、小集団は比較的につくられやすく、人数が多くなるほど信頼関係もなかなか生じにくくなると思う。

次に、ストレオタイプの剥ぎ取り作業はなかなか難しい。「血だらけ」になって痛いから。それと比べて元につけることはいかにも簡単で、教室を出たらすぐ着戻してしまいがちである。また、教室でも知らずのうちに新たなストレオタイプをつけることも考えられる。こういうことを防ぐために、どうしたらいいのだろうか。

最後に、私自身のことになるが、三ヶ月の授業を経て確かに今までのない達成感を感じたにもかかわらず、次もこのような授業を出るか考えると退いてしまうのはなぜだろうか。自己を表現したくないか、レポート書きたくないのか、周りからいちいち言われるのがいやで、自分の好きなようにやらせてほしいのかそれともやはり「考える習慣」がないのか。どっちに対してもちょっと頷いたが、どっちもまた頭を振った。実を言うと、毎週毎週の書き直しと他者の書き直した文を読む作業は実際経験したことのない人でないと、その苦しさは到底理解できないと思う。

以上、自分に将来の命題を残された。これらをすべて解決できる日が一日も早く来るように！

参考文献

細川英雄 『日本語教育何をめざすか』 明石書店 2002

細川英雄編 『ことばと文化を結ぶ日本語教育』 凡人社 2002

徳井厚子 『多文化共生のコミュニケーション』 アルク 2002

佐々木倫子 「日本語教育で重視される文化概念」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』
凡人社

G B K 講義時配布プリント

執筆者紹介

徐 揚 早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程
根木 良江 パリ第七大学日本語講師

論集 ひとつことば 第5号 (2003年度 春学期)

発 行 日 2003年 12月 1日

発 行 ・ 編 集 早稲田大学大学院 日本語教育研究科 言語文化教育研究室
〒169-8050 新宿区西早稲田1-7-14

発行兼編集責任 細川 英雄
<http://www.f.waseda.jp/hosokawa/>